

熊取町文化財報告第7集

# 東円寺跡発掘調査概要・III

1989年 5月

熊取町教育委員会

東円寺跡発掘調査概要・正誤表

ページ	行	誤	正
P 14	17行目	ユビアサエ	ユビオサエ
P 27	32行目	(第39図266)	(第38図266)
P 27	35行目	いずれはとも	いずれとも
P 28	1行目	(第40・41・42図)	(第39図・40・41図)
P 32	24行目	元富通寶	元豊通寶
P 33	5行目	埋藏文化在	埋藏文化財
P 33	20行目	浅井もので	浅いもので
P 34	8行目	日常雜器には器には	日常雜器には
P 37	13行目	熊取町教育委員会	日本中近世土器研究会

## はしがき

熊取町教育委員会では本町野田周辺に所在する東円寺跡におきまして発掘調査を実施してきましたが、このたびまた新たな知見を得る機会を得ました。

今回の調査では12世紀から14世紀までの当時東円寺を支えていたであろう集落の一部を検出し、その集落の一部で工房跡とみられる建物を検出しました。また、遺物として瓦器塊を中心に中世の日常雑器が多量に出土しています。このことから中世の集落の一端を窺い知る資料が得られました。これらの資料をさらに蓄積することによっていずれ東円寺跡周辺の中世があきらかにされることとおもわれますが、それは熊取町のみならず、泉州地区全体の中世をあきらかにしていく基礎となるでしょう。

本書が私たちの先人の生活を知るうえで、また熊取の歴史を明らかにするための資料として少しでもお役に立てばと念願する次第であります。

なお、今回の調査に際し、全面的なご協力を賜りましたくまとり泉州興産株式会社並びに現地での調査および本書の作成にご尽力いただいた方々に対し深く感謝の意を表します。

平成元年5月

熊取町教育委員会

教育長 山中長正

## 例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会がくまとり泉州興産株式会社からの依頼を受けて昭和63年度に実施した東円寺跡の88年－1区、88年－2区、88年－6区の調査概要報告書である。
2. 調査は熊取町教育委員会発掘調査嘱託員井田匡を担当者として東円寺跡88年－1区・2区の調査を昭和63年4月27日に着手し、平成元年1月28日終了した。  
東円寺跡88年－6区の調査を昭和63年12月24日に着手し、平成元年1月28日終了した。  
整理作業については昭和63年4月27日に着手し、平成元年5月31日終了した。
3. 調査に要した費用は全額がくまとり泉州興産株式会社の負担によるものである。
4. 調査の実施と整理にあたっては、調査補助員岩根幹一、久世公一、大宅一紀、井手口大作、幸前和裕、池辺吉也、義本哲司、岡崎喜一、覚野和代、腕野登志、富村伊都子、小田貴子、辻本栄子、浅野佳子、安福佳代、安田律子、大門由香里、菅野幸子、岸田浩美、戸谷真理子の諸氏の参加を得た。また、くまとり泉州興産株式会社・大森組・竹口文化財上木工業所・関西航測株式会社並びに関係者各位より多大な協力を得た。明記して感謝の意を表したい。さらにくまとり泉州興産株式会社代表取締役川畑勇氏と泉州興産株式会社の勝村泰智氏には報告書発刊の間際まで何かとご尽力いただいた併せて感謝する次第である。
5. 本書中の標高は東京湾平均海水面を基準とし、方位は地図以外は磁北を示すものとした。
6. 本書に掲載している遺物については本文、図版及び

挿図中同一番号及び同一記号を使用している。

7. 本書の執筆・編集は井田がおこなった。
8. 調査にあたっては写真・実測図等が記録を作成するとともにカラースライドを作成した。広く利用されることを望む。

## 目 次

第 1 章	はじめに	
第 1 節	位置と環境	1
第 2 節	既往の調査	1
第 3 節	調査に至る経過	2
第 4 節	地区的名称および遺構の呼称について	2
第 2 章	調査結果	
第 1 節	調査の概要	7
第 2 節	東円寺跡88年－1区の検出遺構	7
第 3 節	東円寺跡88年－6区の検出遺構	10
第 4 節	東円寺跡88年－1区遺構の出土遺物	11
第 5 節	東円寺跡88年 1区包含層の出土遺物	16
第 6 節	東円寺跡88年－1区その他の出土遺物	18
第 7 節	東円寺跡88年－6区の出土遺物	21
第 3 章	まとめ	32
第 4 章	東円寺跡88年－2区の調査	33
付編	東円寺跡出土の中世遺物について	34

## 図 版 目 次

図版第一	東円寺跡88年 1区調査区全景
図版第二	東円寺跡88年－1区遺構検出状態
図版第三	東円寺跡88年 1区遺構検出状態
図版第四	東円寺跡88年－1区及び2区遺構検出状態
図版第五	東円寺跡88年－1区及び2区遺構検出状態
図版第六	東円寺跡88年－6区全景
図版第七	東円寺跡88年－6区遺構検出状態
図版第八	東円寺跡88年－6区遺構検出状態
図版第九	東円寺跡88年－6区遺構検出状態
図版第十	東円寺跡88年－6区遺構検出状態

図版第十一	東円寺跡88年－1区出土遺物(1)
図版第十二	東円寺跡88年－1区出土遺物(2)
図版第十三	東円寺跡88年－1区出土遺物(3)
図版第十四	東円寺跡88年－1区出土遺物(1)
図版第十五	東円寺跡88年－1区出土遺物(2)

### 挿 図 目 次

第 1 図	熊取町の位置
第 2 図	調査地位置図
第 3 図	調査地地区割り図
第 4 図	東円寺跡88年－1区・6区土層模式図
第 5 図	東円寺跡88年－1区・6区平面図
第 6 図	東円寺跡88年－1区上層平面図（鍵跡）
第 7 図	SK-02平面図・断面図
第 8 図	SD-1出土遺物
第 9 図	SD-2出土遺物
第 10 図	SD-2出土須恵質甕
第 11 図	SH-1出土遺物
第 12 図	SX-1出土遺物
第 13 図	SX-2出土遺物
第 14 図	SX-3出土遺物
第 15 図	SE-1出土遺物
第 16 図	1区Pit出土遺物
第 17 図	SK-1出土遺物
第 18 図	土器溜り出土遺物
第 19 図	1区包含層の出土遺物(1)
第 20 図	1区包含層の出土遺物(2)
第 21 図	1区包含層の出土遺物(3)
第 22 図	SD-1出土常滑甕
第 23 図	常滑甕拓影
第 24 図	1区特殊遺物
第 25 図	SH-1出土平瓦
第 26 図	1区出土渡来鏡拓影
第 27 図	土器溜り出土遺物(1)

第 28 図	土器溜り出土遺物(2)
第 29 図	土器溜り出土遺物(3)
第 30 図	土器溜り出土遺物(4)
第 31 図	土器溜り出土遺物(5)
第 32 図	土器溜り出土遺物(6)
第 33 図	土器溜り出土遺物(7)
第 34 図	S D - 0 1 出土遺物
第 35 図	S D - 0 3 出土遺物(1)
第 36 図	S D - 0 3 出土遺物(2)
第 37 図	P i t 0 1 1 8 出土遺物
第 38 図	S K - 0 2 出土木片
第 39 図	6 区包含層出土遺物(1)
第 40 図	6 区包含層出土遺物(2)
第 41 図	6 区包含層出土遺物(3)
第 42 図	6 区出土瓦
第 43 図	東円寺跡88年 - 2 区平面図
第 44 図	東円寺跡88年 - 2 区出土遺物
第 45 図	貝塚市遺跡群における中世遺物編年試案

### 表 目 次

第 1 表	東円寺跡88年 - 1 区・6 区出土瓦器塊の口径と器高
第 2 表	東円寺跡88年 - 6 区土器溜り出土瓦器塊の口径
第 3 表	東円寺跡88年 - 1 区・6 区出土瓦器小皿の口径と器高

# 東円寺跡発掘調査概要・III

## 第1章 はじめに

### 第1節 位置と環境

東円寺跡は、大阪府泉南郡熊取町大字野田に所在し、熊取町役場及び公民館周辺に位置している。付近の地形は埋積谷と段丘面で構成されており、標高は海拔32mから40mを測る。

遺跡の範囲は、北は大原地、南は大井出川・住吉川、西は口無池、東は町立中央小学校東側の段丘までで、東西900m、南北400mの広がりを持つ、奈良時代から江戸時代にかけての寺院跡と集落遺跡である。

東円寺跡の存在する大井出川・住吉川流域には、他にも遺跡が多く存在しており、熊取町内では大浦中世墓地・口無池遺跡・鉾原遺跡・大久保B遺跡・大久保D遺跡が存在する。さらに下流の泉佐野市域では、山出遺跡・植波羅密寺・片原の里遺跡・湊遺跡などが存在する。大井出川・住吉川流域周辺では、あらたに遺跡が発見される可能性は極めて高く、その位置と範囲の確定は今後の課題である。

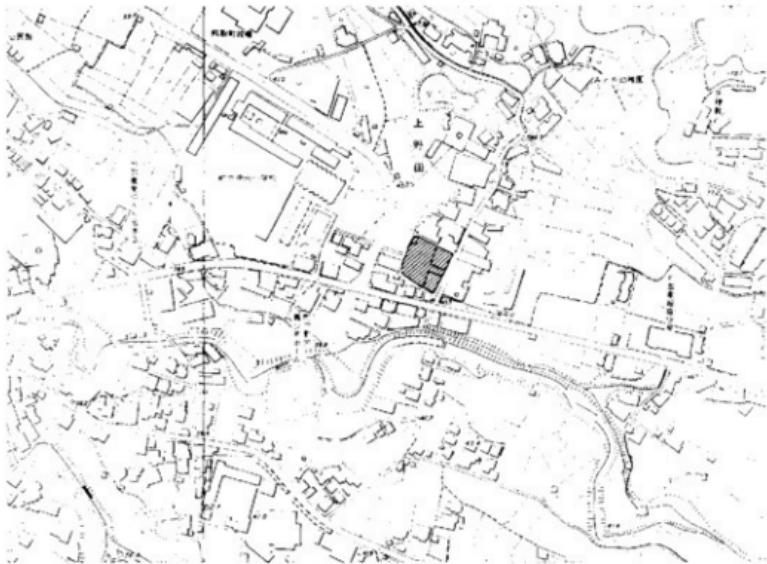
### 第2節 既往の調査

東円寺跡は、昭和52年発行の大坂府文化財分布図にその位置と範囲が初めて掲載された。遺跡となつたのは範囲内で古瓦などの遺物が多量に散布していることと寺に関係する小字名と考えられる人門、どぶ池（堂の池）・豈寺・東照寺・東円寺・堂の後などの小字名を持つ水田が、一ヵ所に集中して存在することから遺跡として取り扱われることとなつた。

東円寺跡での既往の調査としては、範囲内を東西に横切る外環状線の建設に伴い、大阪府教育委員会により、昭和57年から59年の間に3次の調査が実施された。また、熊取町教育委員会においても消防署の建設に伴う調査をはじめとして、個人住宅などの建築に伴い数次の発掘調査を実施してきた。その結果として、平安末期の創建と伝わる寺そのものに関係する遺構こそは、検出されていないが、奈良時代から近世までの建物跡・柱穴群・水田・畑・灌漑用の水路などの遺構を検出しており、寺に関係するとと思われる瓦や多種多様な遺物が出土し、東円寺（跡）を支えていたと思われる「経済基盤」としての集落の存在を窺わせる資料が既往の調査によって得られている。



第1図 熊取町の位置



第2図 調査地位置図

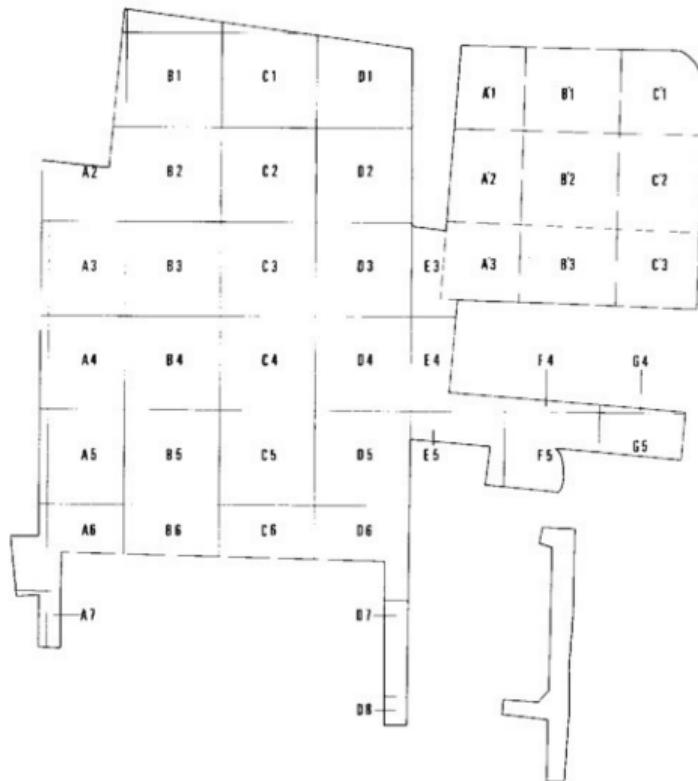
### 第3節 調査に至る経過

熊取町大字野田2133、2134番地において、くまどり泉州興産株式会社が宅地の造成を計画し、昭和62年12月28日付で文化庁に土木工事に伴う埋蔵文化財の発掘届出書が提出された。その後、熊取町教育委員会に昭和63年1月6日付で、埋蔵文化財包蔵地の存在確認調査依頼書が提出された。これを受けて、熊取町教育委員会では同年1月18日に、機会により試掘調査を実施し、遺構及び遺物包含層を確認し、同年1月25日人力による試掘調査を実施したところ多量の遺物と遺構が検出された。

これに基づいて遺跡の取り扱いについて、熊取町教育委員会とくまどり泉州興産株式会社の双方で協議を重ね、遺跡の重要性に鑑みて昭和63年7月に掘削を予定している道路部分と住宅が建築される650平方メートルについて東円寺跡88年-1区として調査を実施した。さらに、昭和63年12月23日付で残り400m<sup>2</sup>にまつての取り扱いについて協議し、250m<sup>2</sup>について東円寺跡88年-6区として調査を実施した。

### 第4節 地区の名称と遺構の呼称について

東円寺跡88年-1区では、5m四方の調査地区的地区割りを実施した。南北方向は、アルファベットによる地区名で呼称し、西端よりA・B・C・Dと表す事とした。東西方向は、アラビア数字による地区名で呼称し、1・2・3・4と表す事とする。本書中でも遺構の位置等の表し方は、これに準じてA1、B2と表す事とする。また、東円寺跡88年-1区での南北の基準線

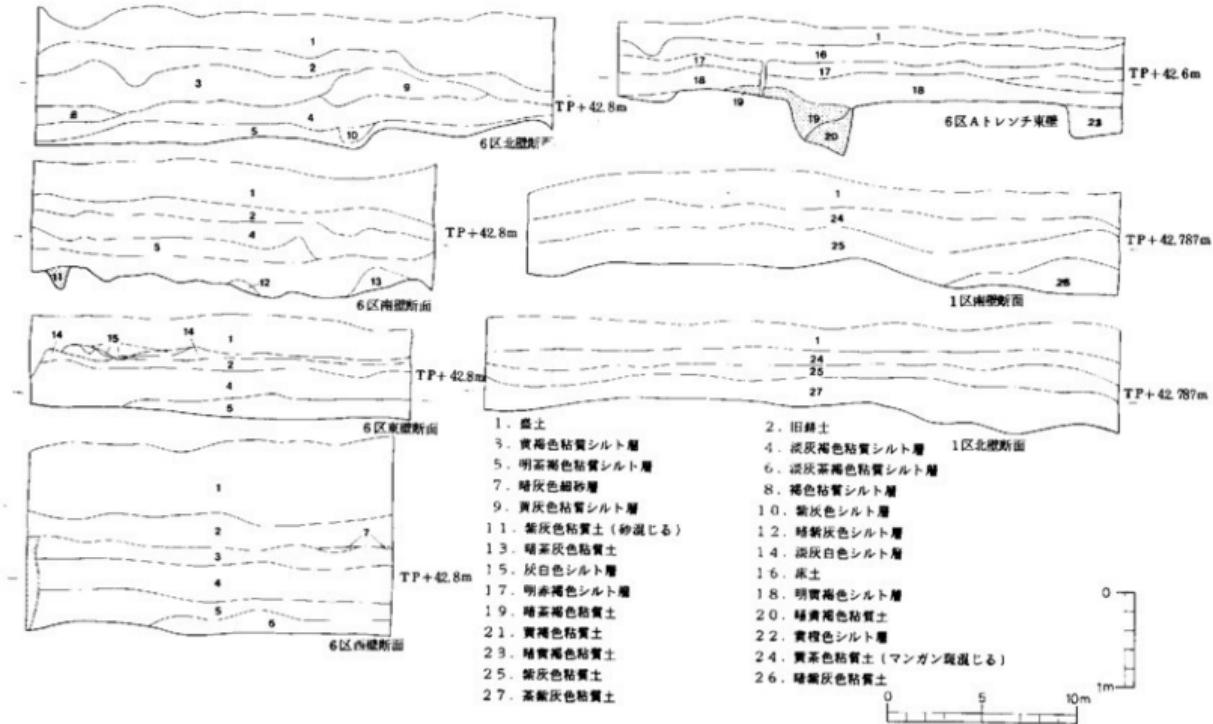


第3図 調査地地区割り図

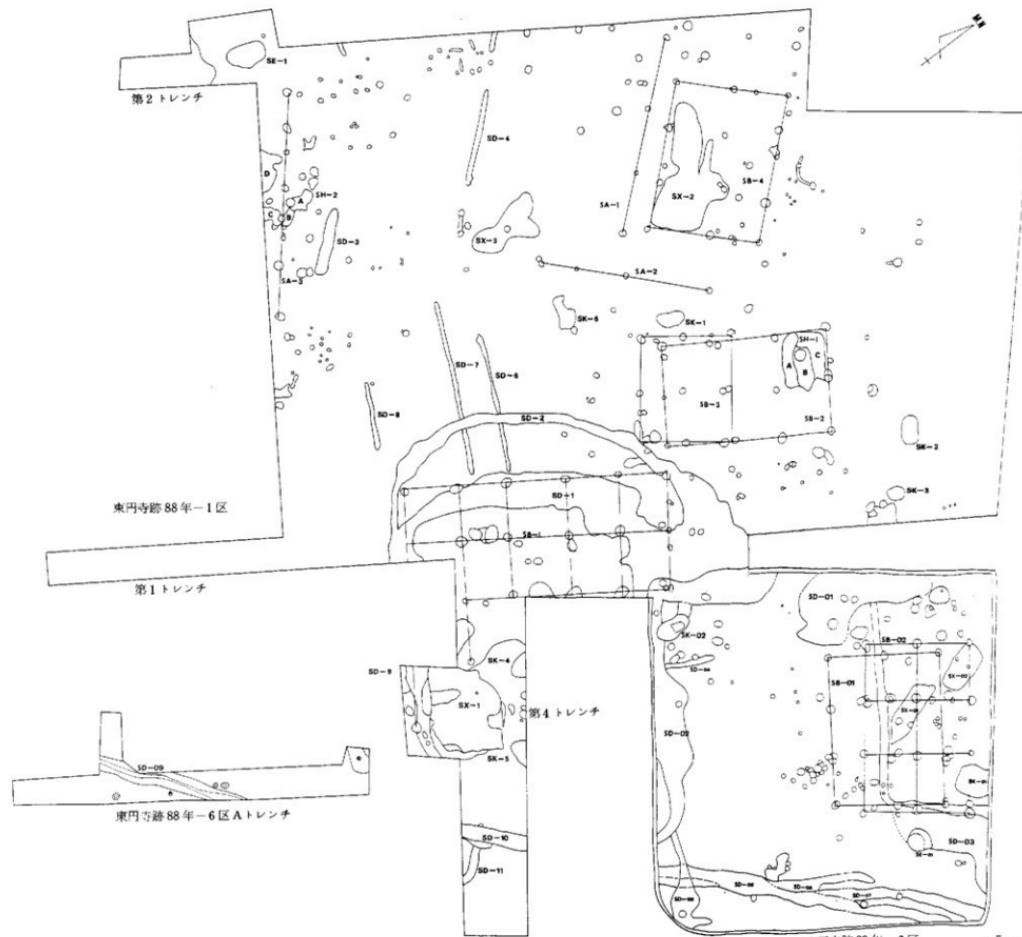
は西へ40°ふっている。

東円寺跡88年-6区でも、5m四方の調査地区の地区割りを実施したが、南北方向は、アルファベットによる地区名で呼称し、西端よりA'・B'・C'・D'と表す事とした。東西方向は、アラビア数字による地区名で呼称し、1・2・3・4と表す事とする。本書中でも遺構の位置等の表し方は、これに準じてA'1、B'2と表す事とする。

また、東円寺跡88年-1区において、調査を実施する最に遺構については、検出した準に遺構の略称とアラビア数字を組み合わせて呼称することとした。略称は溝をSD、柱穴をPit、建物跡をSB、棚列・杭列をSA、土壤をSK、焼土壤をSH、不整形土壤をSX、その他の遺構は遺構の種類で呼称したが、本書中でもこれに準じてSD-1、SD-2と呼称することとす



第4図 東円寺跡88年-1区・6区土層模式図



第5図 東円寺跡88年-1区・6区平面図

る。また、東円寺跡 88年-6区においても調査を実施する最に遺構については、検出した順に遺構の略称と番号を組み合わせて呼称することとした。略称は東円寺跡 88年-1区と同じ方法で呼称するが、本書中では遺構名が重複することを避けるために、出土順に番号の前にアラビア数字の0を組み入れてSK-02と呼称することとした。

## 第2章 調査結果

### 第1節 調査の概要

調査を実施した地点は、小字名ではたらり若しくは多々良と呼ばれる地点であり遺跡範囲の東端に接する部分である。現状は水田で、地表面のレベルは周囲の水田より約40cm程高く、標高は39cm前後を測る。

検出した遺構としては、東円寺跡 88年-1区については溝が9条、櫛列が1列、建物跡が1棟、土塁が3基、不整形土壙を3基検出し、柱穴や鍛跡も多数検出した。また、東円寺跡 88年-6区については溝が9条、建物跡が2基、土塁が3基、不整形土壙を2基検出し、柱穴も多数検出した。遺物の量は多く、主に12世紀から14世紀までのもので、遺構に伴う遺物が多かった。ただ近世の遺物の極端に少ないことから近世以降に削平をうけているものと思われる。

### 第2節 東円寺跡 88年-1区の検出遺構

#### ① 溝

溝は全部で11条検出した。SD-1は最大巾2.4m、最小幅40cm、深さ約30cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては、瓦器塊・瓦器小皿・土師器小皿・常滑の甕・東播系こねばちなどの破片が出土した。

SD-2は最大幅1.3m、最大巾20cm、深さ約30cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては、須恵質の甕・瓦器塊・瓦器小皿・土師器小皿・常滑の甕・東播系こねばちなどの破片が出土した。

SD-3は巾43cm深さ15cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては瓦器の破片が出土した。

SD-4は巾23cm、深さ約10cmを測り、SD-5は巾20cm前後、深さ約5cmを測る。SD-4・5の遺構覆土は紫灰色粘質砂でいずれも遺物は出土しなかった。

SD-6は巾23cm、深さ約5cmを測り、SD-7は巾22cm、深さ約5cmを測る。さらにSD-8は巾20cm、深さ約5cmを測る。SD-6・7・8の遺構覆土は紫灰色粘質土で、いずれからも遺物は出土しなかった。SD-7・8については同じ間隔で窓曲していることから荷車などの轍跡ではないかと思われる。

SD-9は幅86cm、深さ約25cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては瓦塊器・瓦器小皿・土師器小皿・東播系こねばちなどの破片が出土した。平面図などから判断す

るとSD-1とつながるものと考えられる。

SD-1は巾16.0cm、深さ約5.0cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては瓦器塊・瓦器小皿・土師器小皿などの破片が出土した。

SD-1は巾3.4m、深さ約1.0cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質砂で遺物は出土していない。

#### ② 上 壤

SK-1は短軸5.0cm、長軸1m、深さ約4.0cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で出土遺物としては、瓦器塊・瓦器小皿の破片・平瓦などが出土した。

SK-2は短軸6.0cm、長軸1.1m、深さ約3.0cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、遺物としては、瓦器の破片が出土した。

SK-3は短軸3.5cm、長軸6.8cm、深さ約1.5cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、遺物は、瓦器の破片が出土した。

SK-4は短軸4.0cm以上、長軸7.0cm以上、深さ約1.5cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、遺物としては、瓦器の破片が出土した。

SK-5は短軸6.0cm以上、長軸8.0cm以上、深さ約1.5cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土は、瓦器の破片が出土した。

SK-6は短軸6.0cm、長軸1.4m、深さ約3.5cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で遺物としては、瓦器などの破片が出土した。

#### ③ 焼土壙群-1

SH-1Aは、短軸4.0cm、長軸2.1m、深さ約2.0cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で炭が若干まじる。SH-1Bは、短軸6.2cm、長軸1.7m、深さ約2.5cmを測る。遺構覆土は暗紫灰色粘質土で焼けている土と炭が固まってまじる。SH-1Cは、短軸5.6cm、長軸2m、深さ約2.5cmを測る。遺構覆土は暗紫灰色粘質土で遺構底面は赤く焼けている。

焼土壙群-1ではSH-1CとSH-1A・SH-1Bがそれぞれ切り合っている。断面から観察するかぎりSH-1Cで焼いたものをSH-1A・SH-1Bに埋めたと考えられる。

#### ④ 焼土壙群-2

SH-2Aは、短軸3.6cm、長軸1m、深さ約2.0cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で炭と焼土がまじる。SH-2Bは、短軸3.0cm、長軸6.0cm、深さは約2.0cmを測る。遺構覆土は紫褐色粘質土で焼けている土と炭が固まってまじる。SH-2Cは、短軸2.0cm、長軸9.0cm、深さ約2.5cmを測る。遺構覆土は紫褐色粘質土で焼けている土と炭が固まってまじる。SH-2Dは、短軸4.0cm以上、長軸1.6m、深さ約2.5cmを測る。遺構覆土は紫褐色粘質土で炭を含み、遺構底面は赤くやけている。焼土壙群-2でもSH-2Dのみが焼成しており、他のSH-2A・SH-2B・SH-2Cは焼けた土や炭を処理するために掘削されたと考えられる。

#### ⑤ 建物跡及び柱穴列

S B - 1 は梁間 3 間、桁行 5 間の建物跡で、柱間は梁間が 2.2 m 前後を測り、桁行が 2.4 m 前後を測る。

S B - 2 は梁間 2 間、桁行 3 間の建物跡で、柱間は梁間が 2 m 前後を測り、桁行が 2 m 前後を測る。S B - 2 では建物内の北側に S H - 1 が存在しており、鑄造（鋳造）関係の遺物がこの周辺より出土していることから工房的な性格の建物と思われる。

S B - 3 は梁間 2 間、桁行 2 間の建物跡で、柱間は梁間が 2.1 m 前後を測り、桁行が 2 m 前後を測る。S X - 2 も S B - 3 の関係する構造と思われる。

S B - 4 は梁間 2 間、桁行 3 間の建物跡で、柱間は梁間が 2 m 前後を測り、桁行が 2 m 前後を測る。S B - 4 の南側と西側に S A - 1・S A - 2 があるが、S B - 4 を区画するための櫛岩しくは解ではないかと思われる。

建物跡の向きに関しては S B - 1・S B - 2 が平行に建てられており、S B - 3・S B - 4 はそれぞれちがった向きを示している。このことから、S B - 1・S B - 2 は同時期の建物であることが窺える。

S A - 3 は柱穴の間隔および法量から建物跡の一端ではないかと考えられる。

#### ⑥ 不整形土壌

S X - 1 は短軸 2.5 m 以上、長軸 3.5 m 以上、深さ約 40 cm を測る。遺構覆土は上層は紫灰色粘質土、下層は白色粘砂で、遺物は瓦器塊・瓦器小皿の破片が出土した。

S X - 2 が調査区短軸 1.2 m、長軸 4.8 m、深さ約 20 cm を測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で遺物は瓦器塊の破片が出土した。

S X - 3 は、短軸 7.0 cm、長軸 2.8 m、深さ約 25 cm を測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、遺物は須恵質の甕・瓦器の破片が出土した。

#### ⑦ 鍼 跡

今回の調査では耕作土と床土を除去した時点で多数の鍼跡が



第 6 図 東内寺跡 88年 - 1 区上層平面図（鍼跡）

検出できた。時期的には中世遺構のものであると思われるが、遺物が出土していないので年代については決めかねる。多方向へ跡跡かのひてはいるが一定方向に向かっているものも見受けられる。

### 第3節 東円寺跡 8年 - 6区の遺構と遺物

#### ① 溝

SD-01は巾約1m、深さ約35cmの溝状遺構である。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては瓦器塊・瓦器小皿。紀州系羽釜・瓦質の甕・足釜の脚部など破片で出土した。

SD-02は巾1m、深さ約15cmの溝である。遺構覆土は茶紫灰色粘質土で、出土遺物としては瓦器塊の破片などが出土した。

SD-03は巾30cm、深さ約25cmの溝である。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては瓦器塊の破片などが出土した。ほぼ均一な深さと巾であるが、調査区C' 1では扇状に遺構広がりっており、一番中の広い箇所で2.8mを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては瓦器・土師器などの破片が出土した。また扇状に広がった箇所で土器溜りが検出されているがこれについては『その他の遺構』でふれることとする。

SD-05は巾70cm、深さ約45cmの溝である。遺構覆土は暗紫灰色粘質砂で、出土遺物としては瓦器塊・土師器小皿の破片が出土した。

SD-06は巾30cm、深さ約30cmの溝である。遺構覆土は暗紫灰色粘質砂で、出土遺物としては瓦器・土師器の破片が出土した。

SD-07は巾25cm、深さ約20cmの溝である。遺構覆土は暗紫灰色粘質砂で、出土遺物としては瓦器・土師器の破片が出土した。

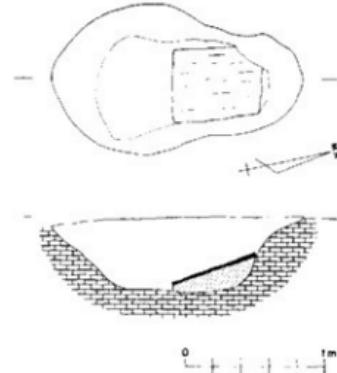
SD-08は巾70cm、深さ約10cmの溝である。遺構覆土は灰色砂で、出土遺物としては瓦片・綠青をふいた錢貨などが出土した。

SD-09はトレーナーAで検出した巾60cm、深さ約45cmの溝である。遺構覆土は茶灰色粘質土で、出土遺物としては瓦器片が出土した。

#### ② 土 壤

SK-01は長軸7.5cm、短軸6.8cm、深さ約6cmを測る土壙で、遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては瓦器片が出土した。

SK-02は長軸12.0cm、短軸6.0m、深さ約6.0cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては瓦器の破片と板状の木片が出土した。



第7図 SK-02平面図・断面図

#### ④ 建物跡

S B - 0 1 は梁間 2 間、桁間 3 間の建物跡で、柱間は梁間が 2 m 前後で桁行が 2. 1 m 前後を測る。

S B - 0 2 は梁間 2 間、桁間 3 間の建物跡で、柱間は梁間が 2 m 前後で桁行が 2. 2 m 前後を測る。

#### ⑤ 不整形土壤

S X - 0 1 は長軸 1. 9 m を測り、短軸 9.5 cm を測る不整形土壤で、深さは約 8 cm を測る。遺構覆土は暗紫灰色粘質土で遺物としては、瓦器塊の破片が出土した。

S X - 0 2 は長軸 2. 4 m を測り、短軸 6.5 cm を測る不整形土壤で、深さは約 7 cm を測る。遺構覆土は上層が多量に炭が混じった暗灰色粘質砂で、下層が暗灰色粘質砂で炭は混じらない。出土遺物としては、瓦器の破片が出土した。炭などの不要なものを埋めたものと考えられる。

#### ⑥ その他の遺構

S E - 0 1 は調査区 C' - 1 で検出した土壤状の遺構で、長軸 9.0 cm、短軸 8.5 cm、深さ約 6.0 cm を測る。遺構覆土は茶紫灰色粘質土で、出土遺物としては、瓦器片が出土した。遺構の性格としては貯水が考えられそうである。

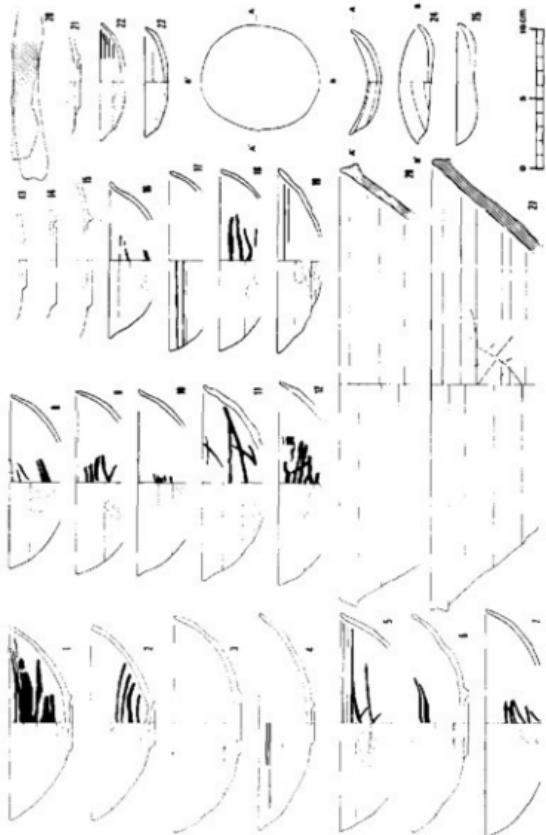
土器窪りは調査区 C' - 1 の S D - 3 の遺構内で検出した。土器が検出できた範囲は長軸 1. 5 m を測り、短軸 1. 2 m を測る。出土遺物は瓦器塊・瓦器小皿・土師器小皿・土師器塊・羽釜である。なかでも瓦器塊は多量に出土している。遺物の埋積状態からみると、不要になった遺物を一ヵ所にまとめて捨てたのではないかと考えられる。さらに遺物と土器窪りの下層の土を除去したところ、S B - 0 2 を構成する柱穴を検出した。このことから S B - 0 2 が倒壊若しくは廃絶してから後に遺物が埋積したことが考えられる。

### 第4節 東円寺跡 88年 - 1 区遺構の出土遺物

出土遺物は、瓦器塊・瓦器小皿・土師器小皿・東播系こねばち・常滑の盤・須恵質の盤・羽釜・紀州系羽釜・瓦質の甕などの中世の日常雑器類である。遺物の時期については 8 世紀から 14 世紀初頭までの時期が与えられそうであるが、主流は 12 世紀後半から 14 世紀初頭の遺物である。以下個々の遺物について述べる。

#### ① S D - 1 の遺物（第 8 図 1 ~ 27）

1 ~ 19・21 は瓦器塊である。1 は外面にはナデ、ユビオサエを施し、内面はヘラケズリされており、みごとに螺旋状文がみうけられる。高台ははりつてある。2 は外面にはナデ、ユビオサエを施し、内面はヘラケズリされ渦巻施状暗文がみうけられる。高台ははりつてある。3・4 は外面にはナデ・ユビオサエを施しており、4 の高台ははりつてあり、断面の形状は逆三角



形を呈す。6は外面にはナデ、ユビオサエを施す。内面はヘラミガキがみられる。5・7・8・9・10・11・12は口縁が残存している破片である、いずれも外面はナデが施されており、内面はヘラミガキが施され、暗文がみうけられる。13・14・15・21は底部の破片である。16はやや外反した口縁部を持つ。17は外面にもヘラミガキの跡がみうけられる。18は内面に螺旋上の暗文がみられる。19はやや薄手で器高が低い。20は平瓦で凸面、凹面ともに調整痕はみられない。端部は荒いヘラケズリがなされている。22・23・24は瓦器小皿で、22は外面は口縁部・体部をナデしてあり、底部はユビオサエしてある。内面はヘラミガキしており、暗文が見られる。23は外面は口縁部・体部にナデを施してある。やや橙茶色を呈しており、二次的な焼成をうけているものと思われる。24は口縁部が両端よりつまみあげたように湾曲している。外面は口縁部・体部がナデされており、底部はユビオサエがなされている。内面はヘラミガキされている。25は土師器小皿で、外面、内面ともに指による調整がなされている。26は瓦質のこねばちで、口縁を含む破片である。27は東播系こねばちである。

② SD-2の遺物（第9図28～43）（第10図44）

SD-2の出土遺物は

すべて破片であった。

28・34・35は瓦器  
塊の底部である。34は  
みこみに暗文がみられる。

29～32・36・37  
は瓦器小皿である。29

は口径7.7cmを測り、  
内面にはヘラミガキが施  
されている。33・38

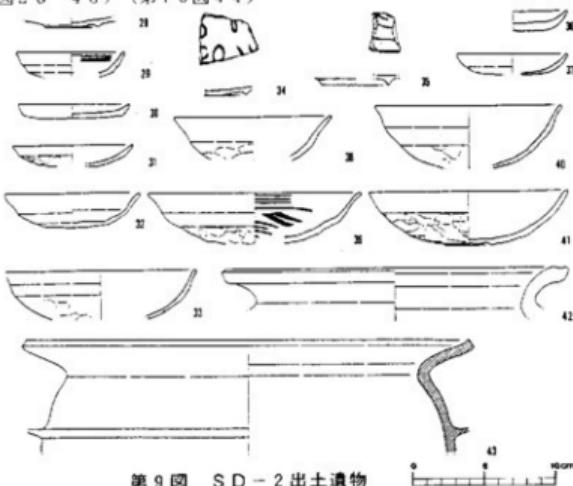
・39・40・41は瓦  
器塊である。33・38

・39・40は底部が欠  
損している。41は外面  
は体部にナデを施し、底  
部はユビオサエしてある

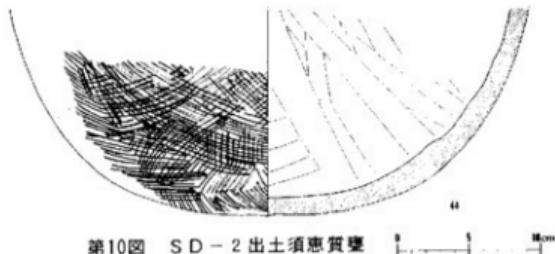
42は須恵質の甕で、口  
縁端部、口縁部外側、頸  
部に調整がみられる。

43は紀州系の羽釜であ  
る。口径は3.1cmを測り、  
羽根部は欠損している。

44は須恵質甕の底部で



第9図 SD-2出土遺物



第10図 SD-2出土須恵質甕

③ SH-1の遺物（第11図45～60）

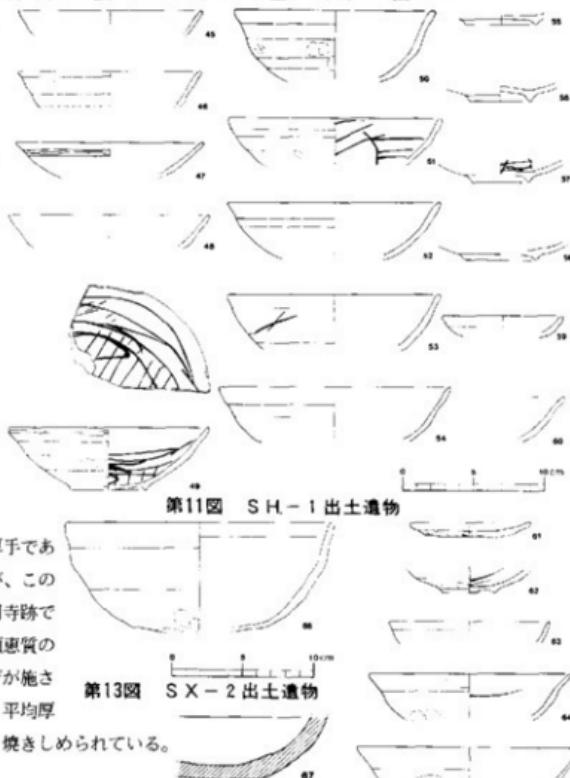
第11図45～60は59の瓦器小皿を除いて、いずれも瓦器塊である。49は外面に密なナ  
デを施し、内面にもヘラミガキを施している。みこみには平行暗文が見られる。45～48は口  
縁、体部を外面にナデを施す。47は外面にヘラミガキが見られる。50～54も口縁、体部の  
破片でいずれも外面にナデを施してある。53には外面にヘラミガキがみられ、51には暗文が  
みられる。55～58は底部の破片であるが、いずれも底部の断面は逆三角形を呈す。59は瓦  
器小皿である。外面はナデを施し、底部はユビオサエしてある。60はやや外反する口縁である。

④ SX-1・2・3の遺物（第12図61～65、第13図66、第14図67）

61は瓦器小皿である。

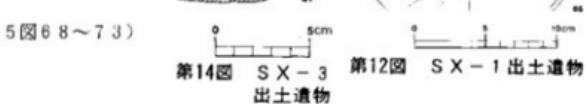
外表面はユビオサエがみられ、器高が著しく低い。

62は瓦器塊の底部の破片である。外表面にはナデ、ユビオサエがみられ、みこみに暗文がみうけられる。断面は逆三角形を呈す。63～65は瓦器塊の口縁部、体部の破片である。いずれも外表面にナデを施してある。66はSX-2で出土した瓦器であるが、外表面、内面共にナデを施してあり、外表面底部にユビオサエの跡がみられる。断面はやや厚手である。器種は塊と思われるが、この形態のものは今まで東円寺跡では出土例がない。67は須恵質の甕の底部で外表面は粗いナデが施され、底部は未調整である。平均厚さは1cm前後を測り、堅く焼きしめられている。



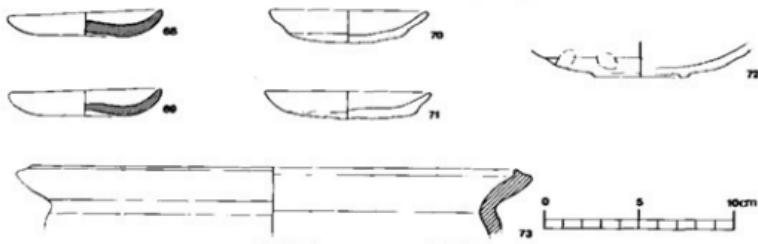
第11図 SH-1 出土遺物

第13図 SX-2 出土遺物



⑤ SE-1の遺物（第15図68～73）

第14図 SX-3  
出土遺物



第15図 SE-1 出土遺物

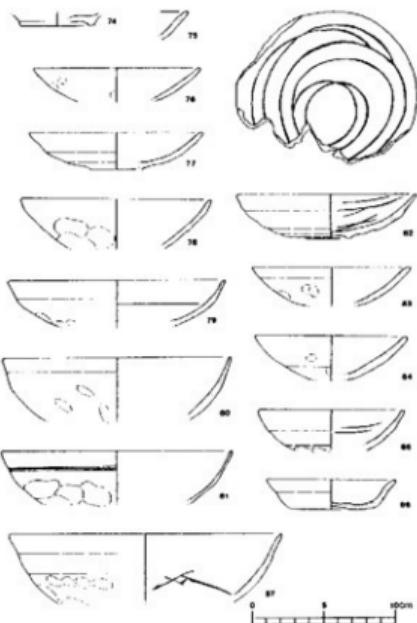
68・69は土師器小皿である。内外面にはユビナデがみられる。69・70は瓦器小皿である。71は瓦器壇の底部、体部の破片である。底部外面にはユビオサエがみられ、高台の断面は逆台形を呈す。72は紀州系の羽釜の口縁部で、口縁端部はやや内傾している。口径は25.4cmを測る。

⑥ Pitの遺物(第16図74~87)

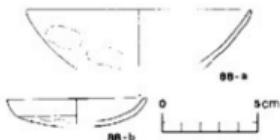
いずれも瓦器壇の破片である。72は底部の破片で、高台断面は逆台形を呈す。74~79・81~83・85は口縁、体部を含む破片である。いずれも外面にナデ、ユビオサエを施し、内面にヘラミガキを施す。80は外面に密なナデがみられ、内面には螺旋暗文がみうけられる。84は瓦器小皿であるが、口縁は外反しており、底部はナデを施してある。この形態の小皿は東円寺跡での出土例はこれ一点であり、搬入品であることを窺わせる。

⑦ SK-1遺物(第17図88-a・88-b)

88-aは瓦器壇で、口縁、体部を含む破片である。やや薄手である。88-bは瓦器小皿である。外面はナデを施し、底部にはユビオサエがみられる。



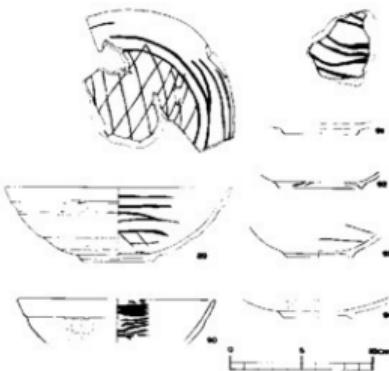
第16図 I区 Pit出土遺物



第17図 東円寺跡88年-1区 SK-1出土遺物

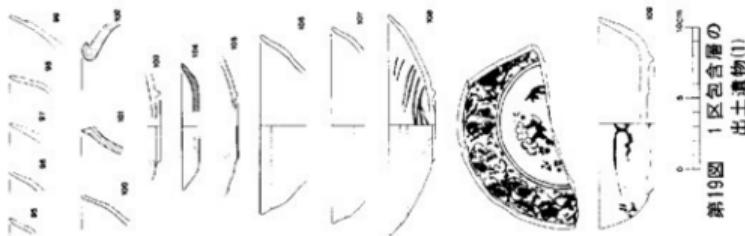
### ⑧ 土器窪りの遺物 (第18図89～94)

土器窪りの遺物はいず  
れも瓦器塊である。89  
は外面に密なナデ、ヘラ  
ミガキを施す。内面みこ  
みには斜格子文がみられ  
る。口径は15.9cmを  
測り、器高は5.3cmを  
測る。高台は外面端部に  
ヘラケズリが加えられて  
ある。90は外面にナデ、  
ユビオサエを施し、内面  
にはヘラミガキが見られ  
る。91～94は底部の  
破片で、その高台断面は  
91・93が逆台形を呈  
し、92・94が逆三角  
形を呈す。



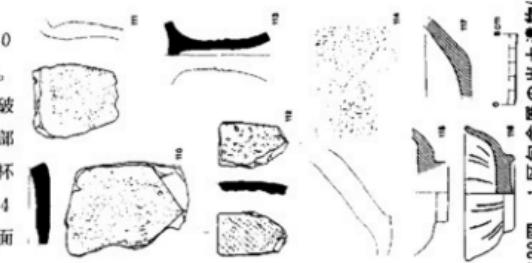
第18図 土器窪り出土遺物

### 第5節 包含層の出土遺物 (第19・20・21図 95～150)



95～100は瓦器塊の口縁部の破片である。101は瓦質の鉢の口縁部で、口縁外面はやや  
内傾している。102は土師質壺の口縁部である。103・105は瓦器塊底部の破片で、高台  
断面は103が逆台形、105が逆三角形を呈す。105は高台を張り付けてある。106・1  
07は瓦器塊の口縁、体部の破片である。108は瓦器塊で外面にはナデ、ユビオサエがみられ、  
内面にはヘラミガキが粗略ながらみられる。高台は張り付けてある。口径は15.6cmを測り、  
器高は3.3cmを測る。109は伊万里の染付皿で、外面に花卉文を配し、内面およびみこみに  
草花文を配す。高台は蛇の目凹型高台である。耕土下面より出土した。110・111・112

第20図 1区包含層の出土遺物(2)



・113は須恵器で、110  
は杯の底部の破片である。

111は壺の頸部、肩部の破  
片である。112は壺の体部  
の破片である。113は高杯  
の脚部の破片である。114  
は須恵質の鉢の破片で、外  
面にタクギが見られる。1

15・116は青磁の碗  
でいずれも施釉が厚い。

117は東播系こねばち  
の底部の破片である。1

18~129・139~  
144は瓦器壠の破片で  
ある。118・119・

120・124・125  
は底部の破片である。1

21は外面にナデ、ユビ  
オサエを施し、内面みこ  
みに斜格子文がみられる。

高台がやや高い。122  
は外面にヘラミガキがみ  
られる。123は口径1  
3.6cmを測り、器高3.  
5cmを測る。外面はナデ  
を施す。127・128

・129・139~14  
4はいずれも外面体部に  
ナデ、底部にユビオサエ  
を施す。130・136  
は土師器小皿で内外面に  
ユビナデが見られる。1

31~135・137・  
138は瓦器小皿である。

いずれも法量に若干の差異はあるものの口縁及び体部にナデを施し、底部はユビオサエしている。

第21図 1区包含層の出土遺物



142は須恵質の鉢で、外面にタタキが施してある。146～149は東播系こねばちの破片である。146・147は口縁外面が垂直であり、148・149は口縁外面がやや内傾している。150は瓦質の鉢で外面横方向へのナデがみられる。

#### 第6節 その他の出土遺物

##### ① 常滑の壺

151はSD

-1で出土した

常滑の壺である。

出土状況は図版

第三の写真との

おり破片が1カ

所に固まって出

土した。復元し

たところ口径は

26.2cmを測

る。各部の調整

については、外

面は口縁、頸部

が丁寧なユビナ

デが施されてお

り、肩部、体部にはいろいろなバター

ンの「目」が施されている。（第23

図拓影1～4参照）また、体部中央ま

で自然釉がかかっている。内面には多

方向へのナデがほどこされてはいるが、

やや粗雑な調整である。焼成は良好で

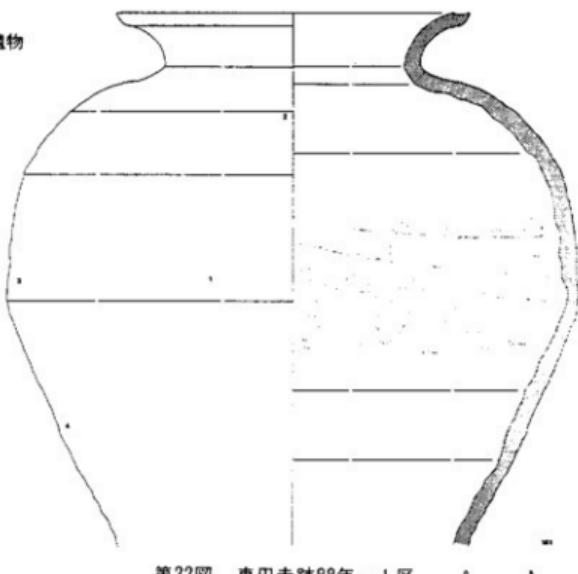
堅くやきしめられている。内面が汚れ

ていないところから、水を貯蔵する壺

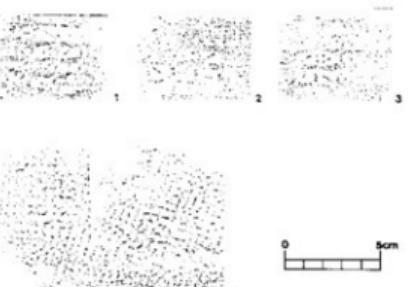
につかわれたものと思われる。

##### ② ふいごの羽口

152はふいごの羽口である。残存は長軸が3.3cmを測り、短軸が3.1cmを測る。端部にはガラス質が付着している。また煤も付着しており、白っぽく焼けている。



第22図 東円寺跡88年-1区  
SD-1出土常滑壺



第23図 常滑壺拓影

### ③ サヌカイトの剝片

153～157はサヌカイトの剝片である。153は長軸3.5cm、短軸1.5cm、平均厚さ0.5cmを測る。154は長軸3.3cm、短軸2.5cm、平均厚さ0.6cmを測る。155は長軸3.3cm、短軸2.1cm、平均厚さ0.5cmを測る。156は長軸6cm、短軸1.8cm、平均厚さ0.7cmを測る。157は長軸1.4cm、短軸1.1cm、平均厚さ0.2cmを測る。

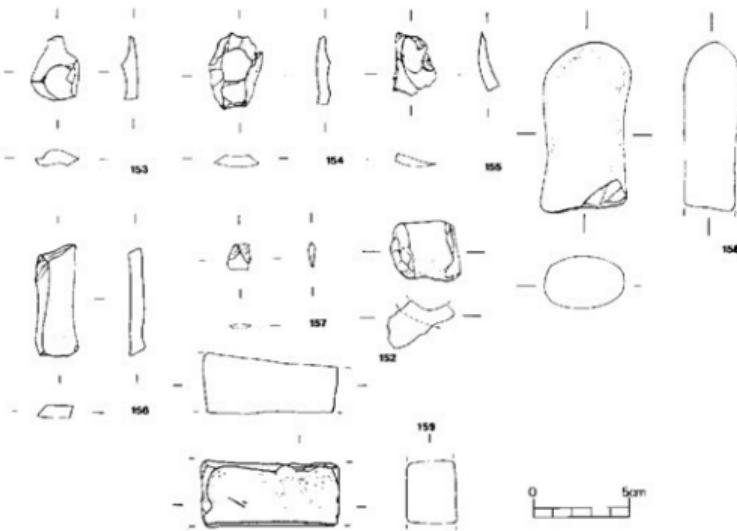
東円寺跡でのサヌカイト出土例としては外環状線の調査でサヌカイト製の石礫が出土しており、剝片などについては85年-2区・86年-4区・87年-1区・88年-4区などから出土している。これら東円寺跡で出土するサヌカイトの原産地については奈良県二上山周辺が想定される。

### ④ 石 棒

158は和泉砂岩製の石棒である。残存は長軸が8.6cmを測り、短軸は4cmを測る。厚さ2.8cmである。片側の端部は欠損している。残存している端部には使用痕が残る。使用目的は何かをたたいたり、すりつぶしたりするのに用いられたと考えられる。

### ⑤ 砥 石

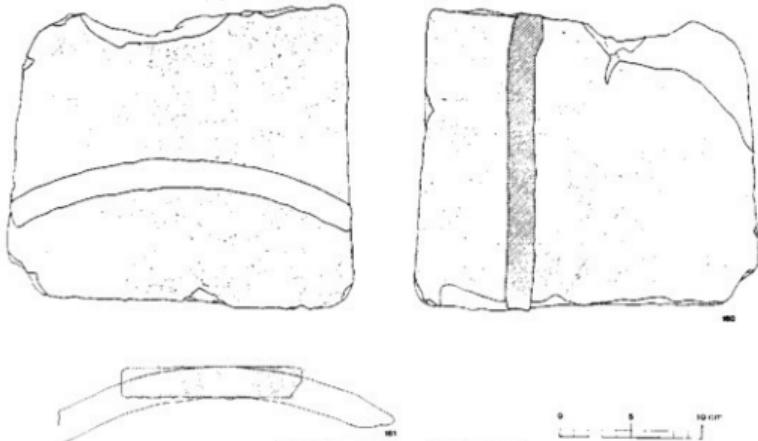
159は砥石である。長軸は7.2cmを測り、短軸は2.9を測る。平均厚さは2.5cmである。両端が欠損しているか、両端以外のすべての面で研いた跡がみうけられる。



第24図 1区特殊遺物

## ⑥ 平 瓦

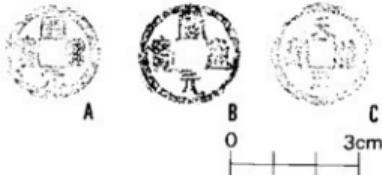
160・161はSK' - 1出土の平瓦である。160は四辺がほぼ残存する平瓦で、長軸は23.5cmを測り、短軸は約20cmを測る。平均厚さは2cmである。凸面凹面共にハナレズナを施し、両側端部はヘラケズリしてある。色調は橙灰色を呈している。161は二辺が残存する平瓦である。胎土はやや粗く、凸面凹面ともにハナレズナを施し、凸面にはナワタキの跡がみられる。色調は茶灰色を呈す。



第25図 SH-1 出土平瓦

## ⑦ 渡 来 錢

A・Bは開元通寶である。AとBはそれぞれが違った鋳型で鋳造されているらしく文字の形や大きさが違う。Cは天禧通寶である。このほかに元豐通寶が破片で出土している。



## ⑧ 金属片 (岡版第13D・E・F・G)

D以外の破片は、磁石を近づけると磁石にはりつくので鉄片であることが判る。Dは白っぽい緑色を呈しており、気泡によるものと思われる穴が多数あいている。金属を溶かしたものようである。E・Fはいずれも鏽が全面に浮いており、鉄であることは確認できるが、どういった破片なのかは判らない。ただ可能性としてスラグ（鉄滓）などが考えられる。Gは鉄釘である。

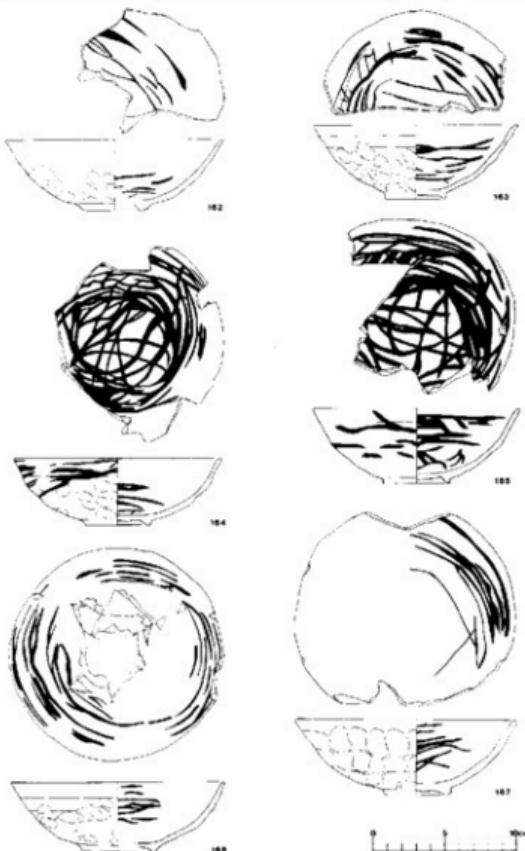
第26図 1区出土渡来銭拓影

## 第7節 東円寺跡88年-6区の出土遺物

東円寺跡88年-6区の出土遺物は、東円寺跡88年-1区の出土遺物とはほぼ同じ状況で、瓦器塊・瓦器小皿・土師器小皿・紀州系羽釜・瓦質の壺・足釜などの日常雑器である。遺物の時期については12世紀から13世紀までの時期が与えられそうである。以下個々の遺物について述べる。

### ① 土器刷りの遺物（第27図～第33図162～242）

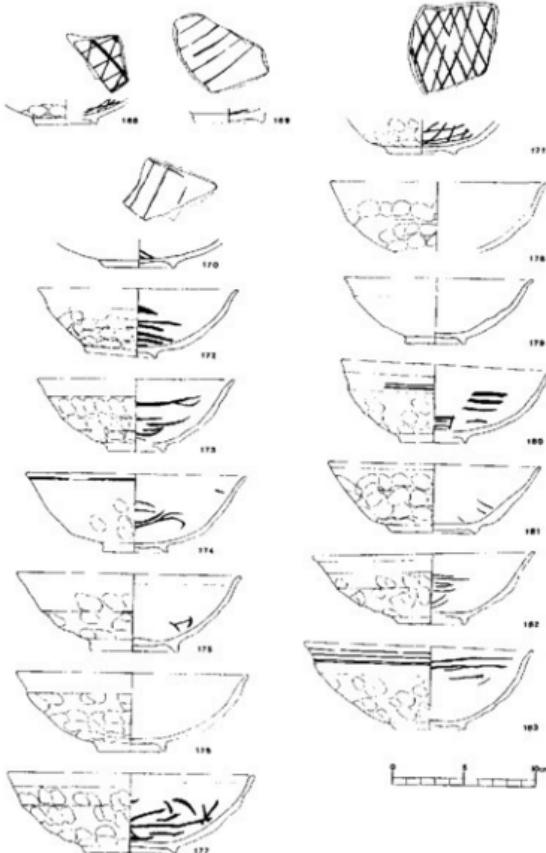
162～221はすべて瓦器塊の破片である。162～167の瓦器については、外面にナデとユビオサエがなされ一部粗略ながらヘラミガキがなされてあるものもある。内面はヘラミガキされている。162は器高5cmを測り、口径は1.5cmを測る。外面にはユビオサエが密に施されている。163は器高5.3cmを測り、口径は1.4.3cmを測る。外面体部にナデを施し、内面には平行文が見える。164は器高4.8cmを測り、口径は1.4.3cmを測る。内面には密なヘラミガキが施されており螺旋文が見える。165は口縁が真上からみると梢円に近い円である。器高は5.3cmを測り、口径は1.4.5cm前後である。166は底部を除きほぼ完形で残存しており、器高は5cmを測り、口径は1.4.3cmを測る。167は体部断面がやや厚くしっかりとしたつくりである。器高は5.3cmを測り、口径は1.5.6cmを測る。



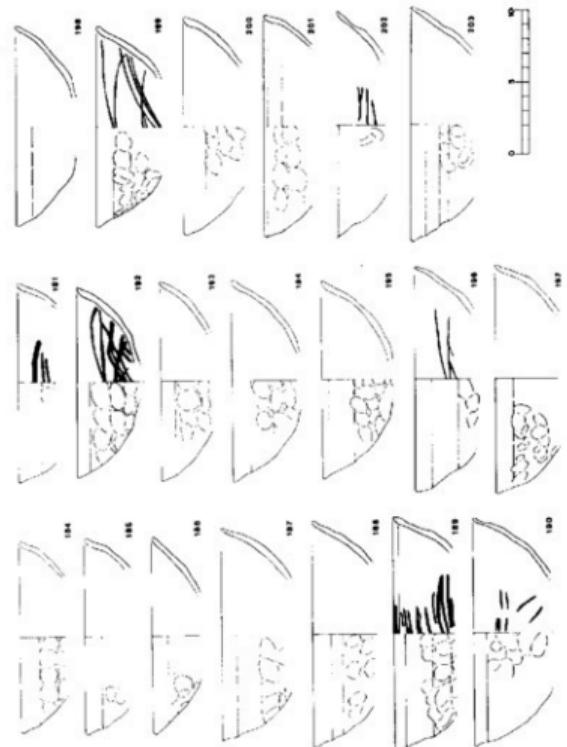
第27図 土器刷り出土遺物(1)

外面はユビオサエの跡がめだつ。168～171は底部のみの破片で、いずれもみこみに暗文が見られる。168・171には斜格子文、169・170には平行文がみられる。172～183は178を除き口縁・体部・底部を含む破片である。172は器高が5cmを測り、口径は13.9cm前後を測る。口縁はやや梢円で、外反している。外面底部はユビオサエが密に施されている。173は器高が5.2cmを測り、口径は13.1cmを測る。外面はヨコナデのちていねいにユビオサエがなされている。口縁はやや外反している。174は器高が5.5cmを測り、口径は17.3cm前後を測る。口縁はやや梢円で、やや外反している。断面からみると薄手である。175は器高が5.4cmを測り、口径は15.6cmを測る。口縁はやや外反しており、外面はナデが施されている。高台が他の瓦器塊と比べて僅も大きい。176は器高が5.6cmを測り、口径は16.2cmを測る。

外面はナデが施され、ユビオサエが密である。177は器高が5.5cmを測り、口径は14.8cmを測る。外面はユビオサエが密に施され、内面にはヘラミガキがなされている。178は口径は17.8cmを測る底部が欠損した破片である。外面にはユビオサエがみられる。179は他の瓦器塊と比べややこぶりで、器高が4.8cmを測り、口径は13.4cmを測る。外反した口縁を持ち、口縁外面にヨコナデを施してある。180は器高が5.5cmを測り、口径は14.8cmを測る。口縁はやや梢円で塊自体もすこしゆがんでいる。外面にはナデ・ユビオサエの他に粗略ながらヘラミガキの跡がみられる。181



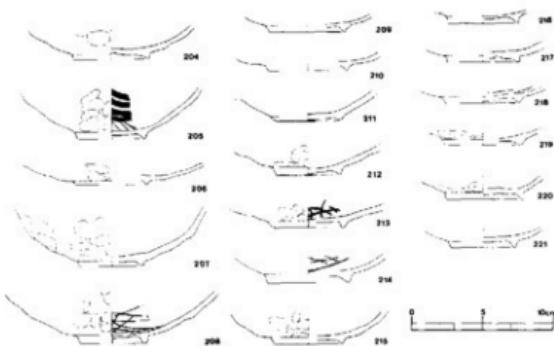
第28図 土器窯址出土遺物(2)



1は器高が5cmを測り、口径は1.4. 5cmを測る。外面に密なユビオサエが施されている。182は器高が5cmを測り、口径は1.5. 7cmを測る。やや外反した口縁を持ち、外面にはユビナデ・ユビオサエが密になされてい。183は器高が5. 8cmを測り、口径は1.6cmを測る。やや外反した口縁を持ち、外面にはナデとユビオサエのほかに口縁の外面にはヘラミガキの跡が見える。内面にもヘラミガキの跡が顯著に見られる。

183～203はいずれも口縁・体部を含む破片で、底部(高台)は欠損している。184は口径1.3. 2cmを測り、外面はナデとユビオサエが施されている。185は口径1.3. 9cmを測り、口縁はやや外反している。186は口径1.4cmを測る。器高がやや低い。187は口径1.5cmを測る。外面に切り合ったユビオサエが見られる。188の口径は1.5. 8cmを測る。189は口径1.6. 5cmを測り、外反した口縁である。外面にはナデと密なユビオサエが施され、内面にはヘラミガキがみられる。190は口径1.6. 3cmを測る。やや薄手な壺である。191は口径1.4. 2cmを測る。192は口径1.3. 6cmを測り、外面には密なユビオサエが施され、内面はヘラミガキされており、暗文がみられる。193は口径1.4cmを測る。外面にナデ・ユビオサエが見られる。194は口径1.4. 4cmを測る。外面にナデ・ユビオサエが見られる。195は口径1.4. 1cmを測り、口縁はやや外反している。196は口径1.5. 8cmを測り、外面にはナデ・ユビオサエが施されている。内面には粗いヘラミガキがなされ、暗文もみられる。197は口径は1.6cmを測る。外面のユビオサエが密である。198は口径1.4cmを測る。199は口径1.4. 1cmを測る。外反する口縁を持ち、外面はユビオサエが密になされており、内面も密なヘラミガキが施されている。

200は口徑1.5cmを測り、やや厚手である。201は口徑1.5.5cmを測る。外面にナデ・ユビオサエを施し、内面にもナデを施す。202は口徑1.5.8cmを測る。朝顔状に開いた口縁で、外面にナデを施す。203は口徑1.6.4cmを測る。外面には密なヨコナデが施されている。



第30図 土器窯出土遺物(4)

222は円筒状の土師質の遺物である。器種は不明である。外面にユビオサエの跡がみられる。  
232～2

37は23

5・237

を除き瓦器

小皿である。

223は器

高1.6cm

を測り、口

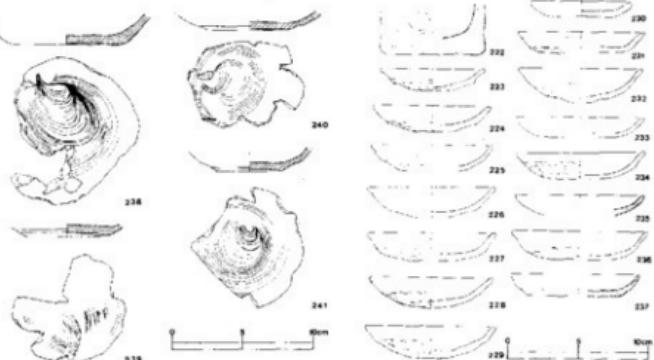
径は7.5

cmを測る。

外反した口

縁を持ち、

外面にユビ



第32図 土器窯出土遺物(6)

ナデ・ユビオサエを施す。224は器高2cmを測り、口

径は8.3cmを測る。外面にユビナデ・ユビオサエを施す。225は口徑8.6cmを測る。22

6は器高2.3cmを測り、口径は8.9cmを測る。227は器高2.2cmを測り、口径は8.9

cmを測る。やや厚手で底部が安定している。228は器高2.3cmを測り、口径は8.6cmを測

る。やや厚手で器高が高い。229は器高2.

4cmを測り、口径は9.2cmを測る。やや厚手

で器高が高い。230は器高1.4cmを測り、

口径7cmを測る。ややこぶりである。231は

第31図 土器窯出土遺物(5)



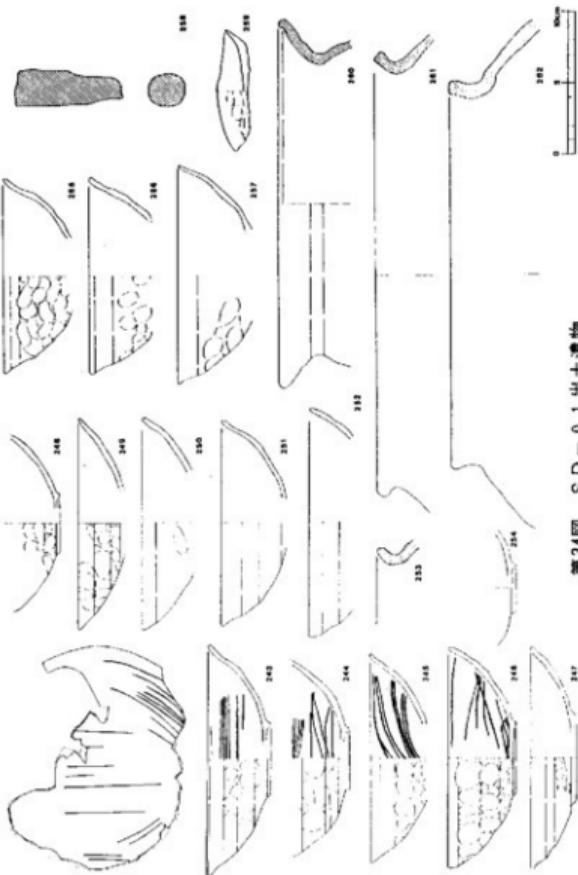
第33図 土器窯出土遺物(7)

器高1.5cmを測り、口径8.9cmを測る。器高が浅く、口径が広い。232は器高2.5cmを測り、口径8.7cmを測る。形態的には228・229とていて。底部外面にはユビオサエが施されている。233は口径9cmを測り、器高は1.5cmを測る。器高が浅く、口径が広い。234は口径9cmを測り、器高は2cmを測る。外面にユビオサエを施す。235は土師器の小皿で口径9cmを測る。236は口径9.7cmを測り、器高は2.2cmを測る。やや外反した口縁を持ち、器高が浅く、口径が広い。237は土師器小皿で口径9.2cmを測り、器高は1.7cmを測る。底部外面に調整痕がみられる。

238～241は土師器の塊かと思われる。上器層から4点が出土した。法量や形態に若干の差異がみられるものの、底部には糸切り痕がみられる。周辺での出土例はなく搬入品であることが窺える。242は瓦質の甕で、口縁と頸部の破片である。口径は22.6cmを測り、頸部内面にナデを施す。

## (2) SD-01の出土遺物(第34図243～262)

243～252・254～257は瓦器塊の破片である。243は口径15.9cmを測り、器高4.4cmを測る。外反する口縁を持ち、やや平らな形で、高台の断面は逆三角形を呈す。外面は密にナデ・ユビオサエが施され、内面にはヘラミガキが施されている。内面みこみに平行文が



見られる。244は底部と体部の残存した破片で、245は口縁と体部の破片である。いずれも外面にはナデ・ユビオサエが施され内面にはヘラミガキがみられる。246は口径1.5. 3cmを測り、奇行4. 7cmを測る。外面は密にナデ・ユビオサエが施され、内面にはヘラミガキが施されている。247は口径1.5. 6cmを測り、器高3. 2cmを測る。やや外反する口縁を持ち、器高が低く平らな形である。外面はナデ・ユビオサエが施されている。248・254は底部の破片である。249～252・255～257は口縁と体部の破片である。いずれも外面にナデ・ユビオサエを施す。口径は249が14. 7cm、250が14. 7cm 251が14. 3cm、252が15. 8cm、255が13. 6cm、256が14. 8cm、275が15. 3cmをそれぞれ測る。253は瓦質の甕の口縁である。258は瓦質の足金の脚部である。259は瓦器小皿であるが、口縁が両端よりはきみこんだように湾曲している。この形態の瓦器小皿は隣接する東円寺跡8年-1区でも出土しており、意図的に口縁を曲げて作られていることが考えられ、使用目的が他の瓦器小皿と異なることも考えられる。260は紀州系羽釜の口縁とおもわれる。口縁内面に一条の沈線がみられる。外面は頸部にていねいなユビナデが施されている。口径は25. 3cmを測る。261・262はいずれも瓦質の甕の口縁である。口径は261が30. 5cmを測り、262が26. 4cmを測る。いずれも胎土は良好である。



第35図 SD-03 出土遺物(I)



第35図 SD-03 出土遺物(II)

③ SD-03の出土遺物(第35図263・第36図264)

263は口径15. 4cmを測り、器高5. 7cmを測る。やや外反する口縁を持ち、外面は密にナデ・ユビオサエが施され、内面にはヘラミガキが施されている。内面みこみ



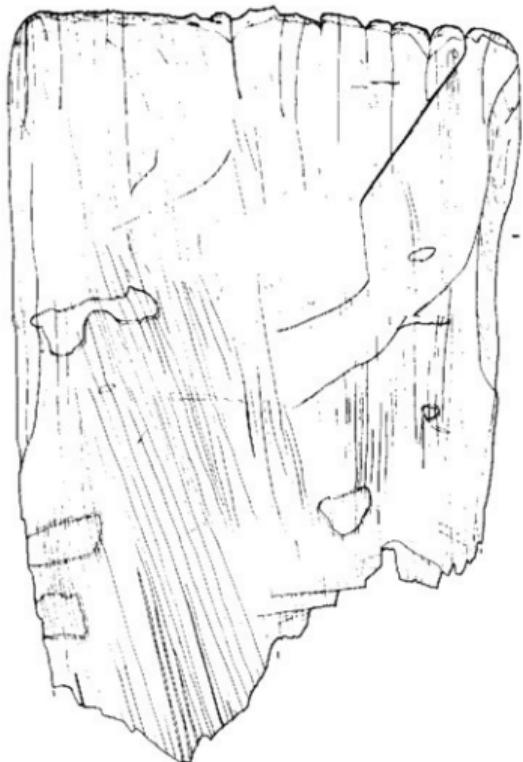
第36図 SD-03 出土遺物(2)

に平行文が見られる。264は白磁の碗で口径は15. 7cmを測る。



④ P0118の出土遺物(第37図265)

265は瓦質の甕の破片で、体部の破片と思われる。外面には多方向への刷毛目がみられ、内面にはユビナデが施されている。



266



第38図 SK-02 出土木片

## ⑤ SK-02の出土遺物（第39図266）

266はSK-02で出土した板状の木片である。長軸は52.7cmを測り、短軸は34.2cmを測る。平均厚は2.5cmを測る。SK-02に何かを埋めてその蓋として使用したことが、考えられる現時点ではいずれはとも決しがたい。

⑥ 包含層の出土遺物（第40・41・42図267～323）

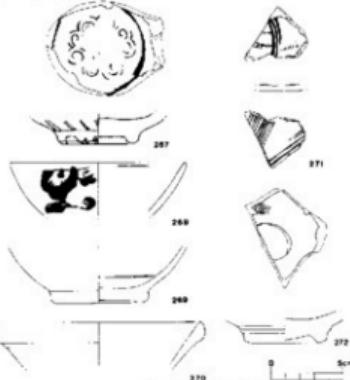
267は青磁碗である。みこには花文と渦巻き状文を配してある。高台径は5cmを測る。268は伊萬里の染付碗で床土内より出土した近世の遺物はこの1点のみの出土である。外面には草花文を配し、呉須の発色が淡い。269・270は白磁の碗で、271・272は青磁である。

273・275～285・289～291・294・232はいずれも瓦器塊の破片である。いずれの瓦器塊も外面にナデ・ヨコナデ・ユビオサエ等の調整などがみられ、一部内面にヘラミガキが施されているものもある。292はやや厚手で口径は13.9cmを測り、器高4.6cmを測る。

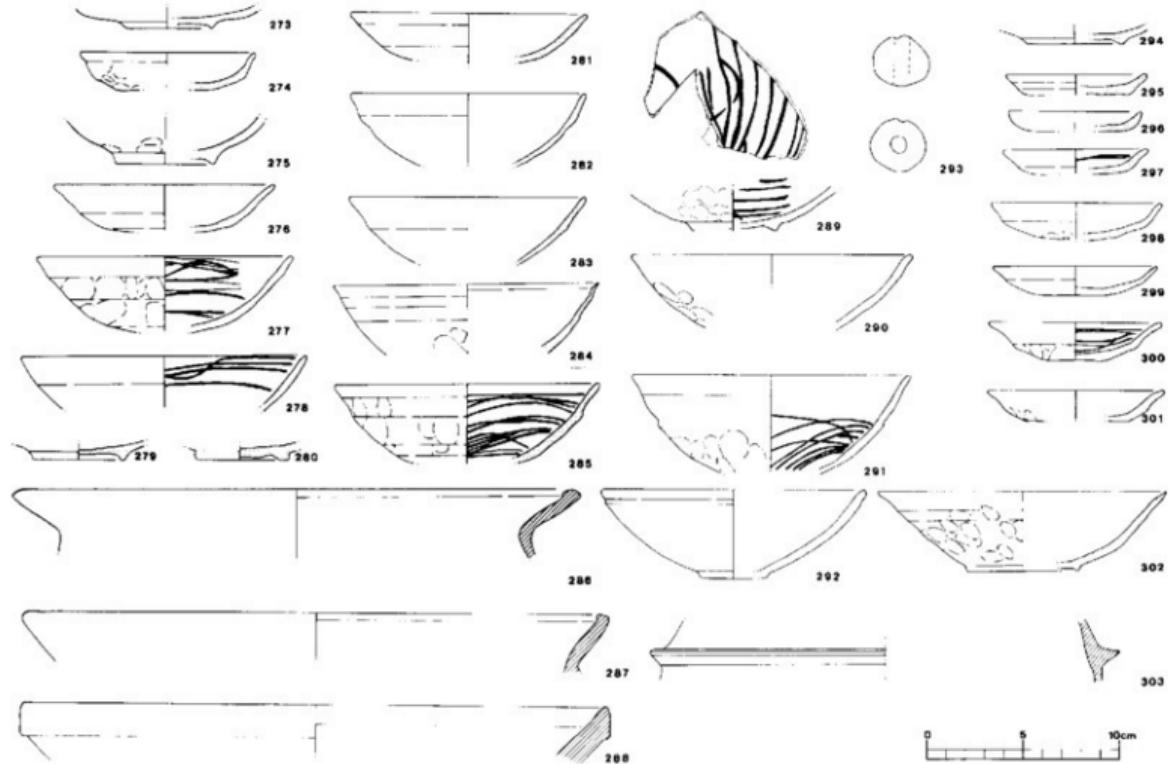
302は口径15.1cmを測り、器高は4.2cmを測る。外面は比較的密なユビオサエが施されている。274・295～301は瓦器小皿である。274は口径が8.1cmを測り、器高は2.4cmを測る、やや器高が高い瓦器小皿である。口縁外面にナデを施し、底部はユビオサエを加えている。295は口径7.3cmを測り、器高1.1cmを測る。底部は平坦で、外面はナデを施してある。296は口径6.8cmを測り、器高1.1cmを測る。調整は読み取れない。297は口径7.6cmを測り、器高1.3cmを測る。やや外反した口縁をもち、外面はナデを施してあり、内面には若干のヘラミガキがみられる。298は口径8.9cmを測り、器高2cmを測る。外面はナデ・ヘラミガキを施してある。299は口径8.6cmを測り、器高1.6cmを測る。外面にナデが施されている。300は口徑8.9cmを測り、器高2cmを測る。外反した口縁をもち、外面にはナデ・ユビオサエを施してある。内面には密なヘラミガキを施してあり、堅縫である。301は口径9.2cmを測り、器高1.6cmを測る。外面にはナデ・ユビオサエが施されている。

286・287は紀州形羽釜の口縁である。口径は286が29.2cmを測り、287が30.3cmを測る。288は東播系こねばちの口縁である。口径は31cmを測る。293は土鍤である。303は羽釜の体部であるが羽根部が欠損している。

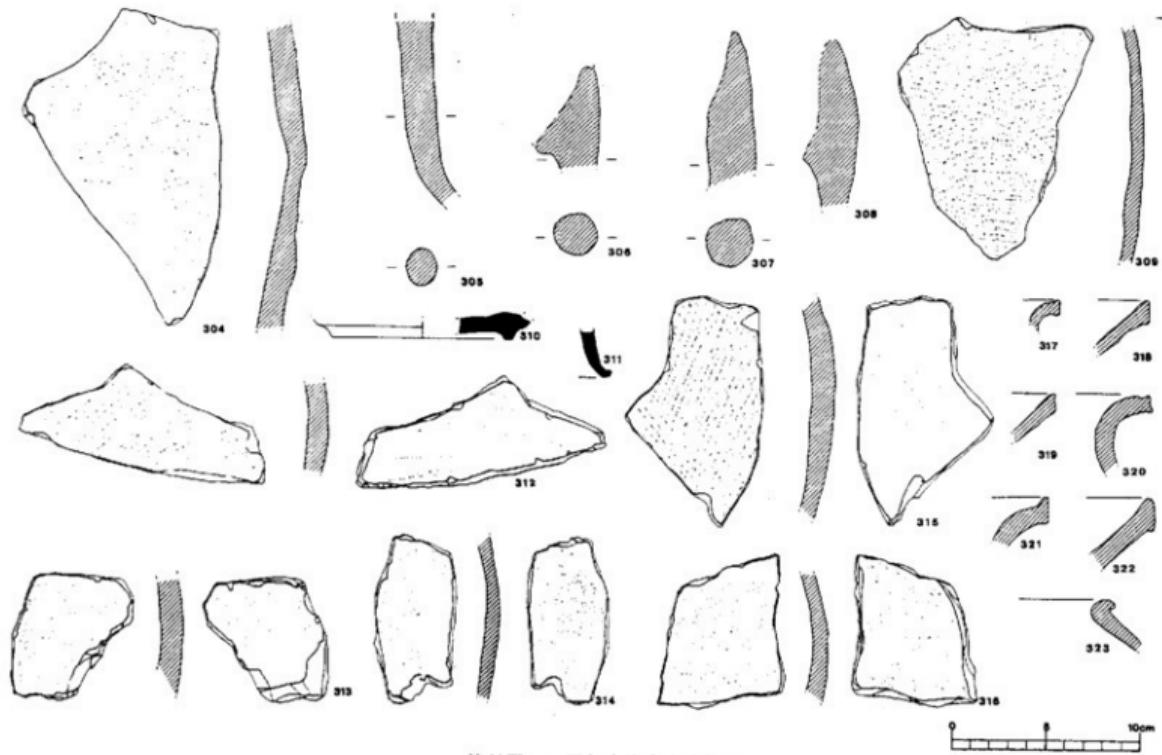
304は須恵質の甕の破片で、体部のものと思われる。外面にタタキを施す。305～308はいずれも足金の脚部である。309は瓦質の甕の破片で、体部のものとおもわれる。Pit1 18で出土したものと同形態のものである。310は須恵器の杯の破片である。311は須恵器の破片であるが、高杯の脚部であろう。312～316は須恵器の甕の破片で、体部の破片である。312・314は外面に多方向への刷毛目がみられ、内面にはユビナデがていねいになされている。313は内外面共に多方向への刷毛目が施されている。315・316は外面に多方向への刷毛目が施されている。317・320・321は須恵質の甕の破片で、口縁である。残存しているところが少ないので反転復元できない。318・319・322は須恵質のこねばち



第39図 6区包含層出土遺物(1)



第40図 6区包含層出土遺物(2)



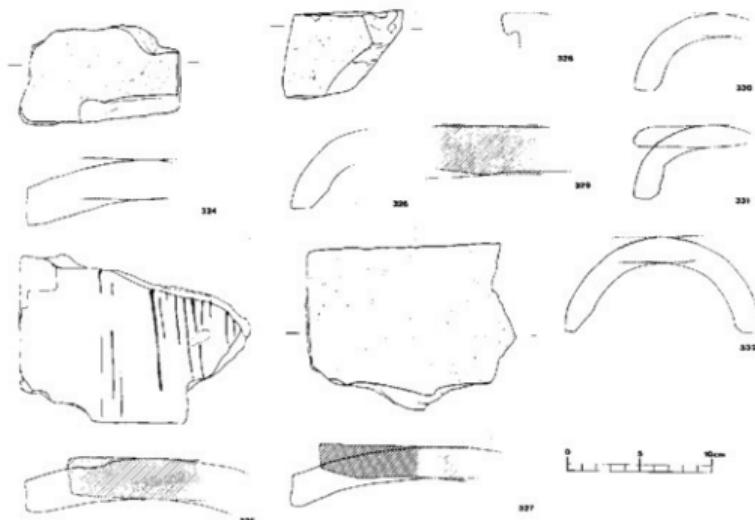
第41図 6区包含層出土遺物(3)

でいずれも東播系のものとおもわれる。323は土師質の甕の口縁である。

⑦ 出土瓦（第43図324～332）

東円寺跡8年-6区においても数片の瓦が出上している。

324は辺のみが残存する平瓦の破片で凸面にハナレズナを施す。平均厚さは3cm前後である。325は二辺が残存する平瓦の破片で、凸面にタタキが見られる。平均厚さは2.8cm前後である。326は一辺のみが残存する丸瓦の破片で凸面にタタキが見られ、凹面にはヘラケズリが見られる。平均厚さは2cm前後である。327は二辺が残存する半瓦の破片で、凸面にタタキが見られる。平均厚さは2cm前後である。328は周縁のみが残存している軒丸瓦の破片である。329は平瓦の破片である。厚さは3.2cm前後を測る。330・331は一辺が残存する丸瓦の破片である。平均厚さは330が1.3cmを測り、331が1.5cmを測る。332は二辺が残存する丸瓦の破片で、巾は1.3.7cmを測り、厚さは1.8cmを測る。



第42図 6区出土瓦

### 第3章 まとめ

東円寺跡 8~8年~1区と6区の調査結果については前述のとおりである。今回の調査では東円寺の発掘調査というよりも、寺を支えていた経済基盤である集落についての調査であり、中世の施設(莊野田村における集落のようす)を垣間見る結果となった。今後も資料の蓄積がさらに必要であるが、今回の調査で知り得たことをすこしまとめておきたい。

東円寺跡 8~8年 1区においては、検出した遺構の多さもさることながら、建物跡を1基検出できた。SB-1は一番大きな建物は5間×3間以上となり、掘立柱建物としてはかなり大きな建物である。SB-2では建物内で火を使用した痕跡があり、遺構の周辺より鉄造関係の遺物が出土しており、何らかの形で鉄造(若しくは鍛造)を実施していたと考えられる。しかし鉄造といつても大規模なものではなく、鋳型などの遺物も出土していないことから、鍛造(若しくは鋳造)といつても極めて小規模な工房であり、鍛冶師や鍛物師によるなど農具や工具の修理・製造などを行っていたと考えられる。また、当該地及び周辺の小字名がたり・たらであることから鉄造に関係する地名であると思われるが、遺構自体を検出しなかったので、当該地との関係に関しては今後検討する必要がある。そのほかに建物跡については、建物を構成する柱穴が並ぶ方位が一定の方位を示すものとそうでないものがあり、建物跡の存在した時期に時期差があるものと判断した。東円寺跡 8~8年 6区において検出したSB-01はSB-1・SB-2と同じ方位を示しており同時期である建物ではないかと考えられる。

出土した遺物も奈良時代の須恵器から近世の伊万里染付まで出土し多様であるが、量的に多いのは1~2世纪後半から1~4世纪初頭の遺物である。在地で生産された遺物(主に和泉型の瓦器壇など)のみならず、各地からの搬入品であるところの常滑の壺・東播系こねばち・紀州系の羽釜を使用しており、常滑の壺・東播系こねばちについては、1~2世纪中頃に搬入され、消費されていたことが窺える。また、青磁・白磁といった輸入品(中国製陶磁器)を使用していたことが確認でき、開元通寶・元嘉通寶・天祐通寶などの唐銭や宋銭などの渡米銭も少量であるが出土している。これらの出土遺物については泉南の各遺跡でも出土しているものもあり、また出土例のないものもある。今後はこれらの遺物について検討し、中世における流通を考察する手段として活用する必要があるのでなかろうか。

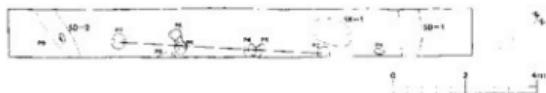
当該地での土地利用の形について総合的に判断すると、8世纪頃から人の生活圈となり、1~2世纪後半には集落の一部を形成し、集落としては比較的豊かであった。1~4世纪初頭には集落が消滅するが、その理由としては集落の移動、集落の放棄などが考えられる。そして居住地である集落から生産の場である耕作地として転換されて、現在に至るのではなかろうか。

今回の調査で得られた知見は多いが、まだまだ解明できない部分が多い。今後さらに周辺での調査結果の蓄積を持って、何らかの形で報告をおこないたい。

## 第4章 東円寺跡88年-2区の調査

## 第1節 調査に至る経過

熊取町大字野田2314番地において、くまとり泉州興産株式会社が盛土工事にともなう擁壁工事を計画し、昭和63年5月31日付で文化庁に土木工事に伴う埋蔵文化財の発掘届出書が提出された。これに基づいて遺跡の取り扱いについて、熊取町教育委員会とくまとり泉州興産株式会社で協議を行ったが、遺跡の重要性に鑑み、擁壁工事によって遺構が破壊される恐れのある部分について、調査を実施すること。また今後は具体的に構造物などの建築の計画がされた時点での協議を実施することで合意した。



第43図 東円寺跡88年-2区平面図

## 第2節 調査の結果

調査を実施した地点は、小字名では堂の後と呼ばれる地点であり、東町寺跡 8.5 年 - 2 区の東端に接する地点である。現状は水田で、地表面のレベルは周囲の水田より、約 3.0 cm ほど高く標高は 3.7 m 前後を測る。調査は調査地内の擁壁工事を実施する箇所に巾 1.5 m、長さ 1.3 m のトレンチを設定して実施した。

層序は単調で約2.0 cmの耕土を除去すると2.5 cm程の遺物包含層が確認され地山に至る。検出した遺構としては、溝を2条、柱穴を9基、土壙を1基検出した。遺構は平均に浅井もので地山に直接掘り込まれている。

出土した遺物はすべて破片で、瓦器塊・瓦器小皿・土師器小皿・東播系こねばち・羽釜などが出土した。333は羽

筆の口縁部である。口

径は29.5mmを測る。

334は瓦器小皿であ

る。器高は1.9cmを

測り、口径は7.7 cm

を測る。やや外反する

当該地では縦小さな山積の測定アリ



第44図 東円寺跡88年-2区出土遺物

当該地では狭小な面積の調査ではあったが、遺構を多く確認し、未調査の部分に関しても建物跡などの遺構が検出れる可能性を提示した。東円寺の推定寺域までの50mの地点にあるため、今後は具体的な建築計画に伴って、調査実施が必要である。

## 付 編 東円寺跡 88年-1区・6区出土の中世遺物について

### ① はじめに

東円寺跡における発掘調査も大阪府教育委員会によって、1983年に外環状線の建設に伴う調査を初めて実施されてから5年目を迎えた。この5年間に大阪府教育委員会と熊取町教育委員会が調査した調査区（註1）からの出土遺物の量は破片も含めて、コンテナにして約40杯ほどの量となった。

調査を実施するたびに感じるのは、中世の日常雑器類の多さである。これら日常雑器には器には器種毎の使用目的といいくつかの組み合わせが想定されるが、その中でも瓦器塊が量的にもめだって多いことから大量に消費されていたことが推察される。また、土師器小皿や瓦器小皿などの遺物についても同様である。瓦器塊については畿内で多量に出土しており、それ故に研究自体も進み、産地や分布圏によっていくつかのタイプに別れ、編年もほぼ確立されている。（註2）

熊取町域において既往の調査で出土している瓦器塊についてはそのほとんどが『和泉型』と称されるものであるが、熊取町に隣接する貝塚市においても王子遺跡の発掘調査に伴い、勝浦康守氏によって『貝塚市出土の瓦器編年試案』として報告されている。（註3）

本稿では、今回調査を実施した東円寺跡 88年-1区・6区の出土遺物である瓦器と瓦器小皿と土師器小皿について検討するが、検討の方法は出土した瓦器塊に対して、5mm単位で口径・器高を階級化し、調整の差異を観察し、一調査区における時期の上限と下限を求めた。また、土師器小皿及び瓦器小皿についても瓦器塊と同じ方法にて変化を追い、一遺構内から瓦器と共に併せて出土した例を用いて時期を観察することとした。なお、時期区分などについては『貝塚市出土の瓦器編年試案』に従った。（註4）

口径 器高 以下	12.5	12.6	13.1	13.8	14.1	14.6	15.1	15.6	16.1	16.6	17.1	以上
2.6-3.0	1											1
3.1-3.5		1										1
3.6-4.0				2			2	2				6
4.1-4.5			1				2		1			4
4.6-5.0			1	2	3	2	2	2	1			11
5.1-5.5				1	2		2	2		1		9
5.6-6.0						1			1			2
6.1 以上												0
(単位) cm	1	1	1	6	5	8	8	5	3	0	1	34

第1表 東円寺跡88年-1区・6区出土瓦器小皿の口径と器高

### ② 東円寺跡 88年-1区・6区出土の瓦器塊について

東円寺跡 88年-1区・6区で出土している瓦器塊の口径は 17.1 cm ~ 12.3 cm の間に分布し、器高は 5.8 cm ~ 2.6 cm の間に分布する。時期については II-2 期 ~ IV-1 期までのものが存在するのではないか、II-2 期としての出土例として東円寺跡 88年-6区の土器溜り（164・165）があげられる。土器溜りからの出土遺物は一括資料としては良好なもので、出土した瓦器塊の法量をみると最大口径は 17.3 cm を測り、最小口径は 13.3 cm を測る。器高については、最大器高 5.8 cm を測り、最小器高は 4.7 cm を測る。口径 14.1 cm ~ 16.6 cm、器高 4.6 cm ~ 5.5 cm 前後のものがグルーピングできるのではないか。調整は、外面はナ

時 期	器 品	瓦 器	瓦 器 小 回	土 器 器 大 回	土 器 器 小 回	瓦 賀 羽 盖	土 器 羽 盖
I							
II	- 1						
II	- 2	1 2 3 4 5 6		214 215 216 217 218 219	220 221 222 223 224 225		
III	- 3		264 265 266 267 268 269	274 275 276 277 278 279	284 285 286 287 288 289		
III	- 1		270 271 272 273 274 275	294 295 296 297 298 299	304 305 306 307 308 309		
III	- 2		314 315 316 317 318 319	323 324 325 326 327 328	334 335 336 337 338 339		
III	- 3		326 327 328 329 330 331	346 347 348 349 350 351	356 357 358 359 360 361	370 371 372 373 374 375	380 381 382 383 384 385
IV	- 1		356 357 358 359 360 361	42 43 44 45 46 47	46 47 48 49 50 51	50 51 52 53 54 55	58 59 60 61 62 63
IV	- 2		362 363 364 365 366 367	56 57 58 59 60 61	60 61 62 63 64 65	68 69 70 71 72 73	78 79 80 81 82 83
IV	- 3		368 369 370 371 372 373	62 63 64 65 66 67	66 67 68 69 70 71	76 77 78 79 80 81	86 87 88 89 90 91
V			374 375 376 377 378 379				92 93 94 95 96 97

第45図 貝塚市遺跡群における中世遺物編年試案

(註3より転載)

デを施し、体部、底部にユビオサエを施すものと外側にヘラミガキが粗略ながら施されるものもあり、全く施されていないものもある。内面はヘラミガキが圓線ミガキも施されていることから、上器縁の瓦器はⅡ-2期～Ⅲ-1期にあたるものと考える。

IV-1の出土例としてはSD-1(2・3・4・6)があげられる。口径14.0cm～

15.5cmに分布し、器高は3.9cm～4.8cmに分布する。内面にわずかにヘラミガキが残り高台断面は逆三角形を呈し、はりつけたような高台である。

#### ③ 東円寺跡88年-1区・6区出土の瓦器小皿・土師器小皿について

東円寺跡88年-1区・6区出土の瓦器小皿は全部で45点、土師器小皿が5点である。量瓦器小皿については2種類のバリエーションがみられる。まず口径が7.5cm～9cm、器高1.1～2.5cmでやや外反する口縁を持ち、外面には1条のナデが施されており、底部はユビオサエが密になされている。内面には粗略なヘラミガキがなされているものがある。6区土器縁から出土である。もうひとつは前述のタイプよりややこぶりで口径が7cm～9cm、器高1.2cmで、外面上には1条のナデが施されており、底部はユビオサエがほどこされではがややあらく、内面には圧痕などがみられるものである。時期的には前者がⅡ-3期にあたるようであるが後者はいずれとも定かでない。

土師器小皿については口径7.6cm～9.5cm、器高1.1cm～2cmに分布しており、外面上および内面にめだった調整の跡もなく、圧痕が共通して存在する。SE-1からの出土である。

#### ④ まとめ

紙数と整理期間に制約があるため、東円寺跡88年-1区・6区の出土瓦器縁については時期の上限と下限について述べるのみになったが、今後の課題としては既往の調査の資料も含めて東円寺跡出土の遺物の検討を実施し、熊取町の中世遺物について編年作業を実施するつもりである。

口径 cm	合計									
	13.1 13.5	13.6 14.0	14.1 14.5	14.6 15.0	15.1 15.5	15.8 16.0	16.1 16.5	16.6 17.0	17.1 以上	
4.6-5.0	1		2	2	1	1				7
5.1-5.5		1	2		2	1	1		1	8
5.6-6.0				3			1			2
6.1										0
6.2-7.0										0
(単位) cm	1	1	4	3	3	2	2	0	1	17

第2表 東円寺跡88年-6区土器縁  
出土瓦器縁の口径

口径 cm	合計									
	6.0 以下	6.1 6.5	6.6 7.0	7.1 7.5	7.6 8.0	8.1 8.5	8.6 9.0	9.1 9.5	9.6 10.0	10.1 10.5
1.0以下			3							1
1.1-1.5	1	23	6	3	3	1	1			18
1.6-2.0			1	2	5	5	3	1		17
2.1-2.5					4	2	2		1	9
2.6-3.0										
単位cm		1	4	19	8	12	6	4	1	45
				1	1	2				5

第3表 東円寺跡88年-1区・6区出土瓦器小皿の口径と  
器高 上段 瓦器小皿 下段 土師器小皿

1.

- 藤沢真依 『東円寺跡発掘調査概要報告書・Ⅰ』 1983年3月 大阪府教育委員会  
芝野主之介 『東円寺跡発掘調査概要報告書・Ⅱ』 1984年4月 大阪府教育委員会  
佐久間貴士・井田匡 『東円寺跡・小垣内遺跡発掘調査概要報告書・Ⅲ』 1985年3月  
大阪府教育委員会  
松村隆文・森屋直樹 『東円寺跡発掘調査概要報告書・Ⅳ』 1986年3月 熊取町教育委員会  
井田匡 『熊取町遺跡発掘調査概要報告書・Ⅴ』 1987年3月 熊取町教育委員会  
井田匡 『熊取町遺跡発掘調査概要報告書・Ⅵ』 1988年3月 熊取町教育委員会  
井田匡 『東円寺跡跡発掘調査概要・Ⅶ』 1988年9月 熊取町教育委員会

2.

- 橋本久和 『中世土器の研究』 『中近世土器の基礎研究』 1985年10月  
熊取町教育委員会

3.

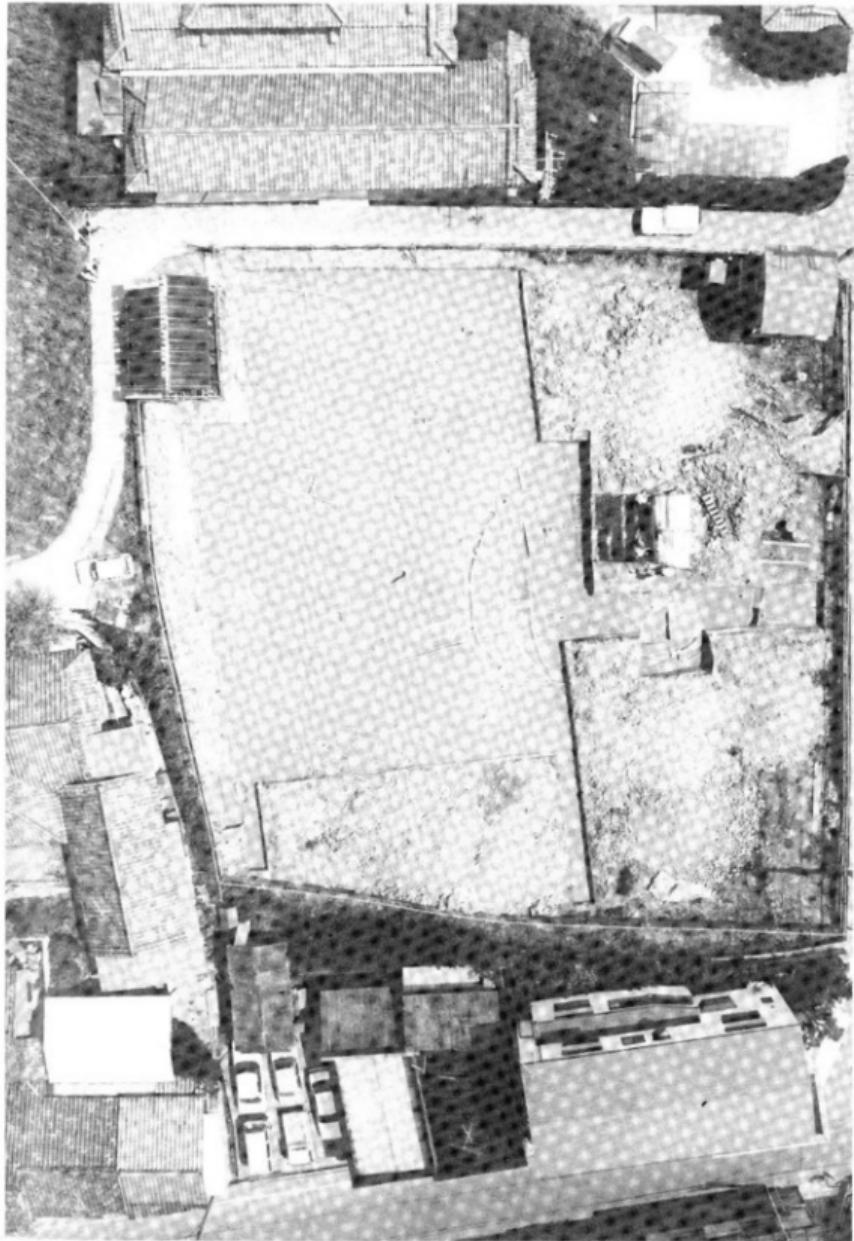
- 勝浦康守 『王子遺跡発掘調査概要Ⅱ第3次調査』 1986年3月 貝塚市教育委員会

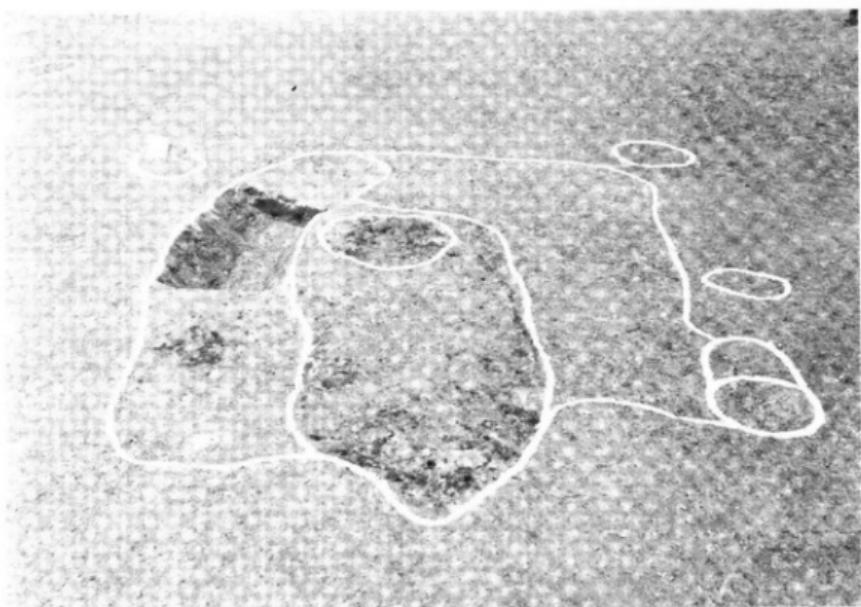
4.

勝浦康守氏は時期区分および、その年代譜については鈴木秀典氏の分類に基づいている。鈴木氏は瓦器塊の流れをⅠ～Ⅴ期に大きく分け、Ⅱ～Ⅳ期を各々3小期に細分している。また、実年代譜については、Ⅰ期を11世紀中葉から約半世紀間、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ期を12、13、14世紀とし、Ⅴ期を15世紀前半に想定しているようである。

# 図 版

図版第一 東円寺跡88年1-1区調査区全景

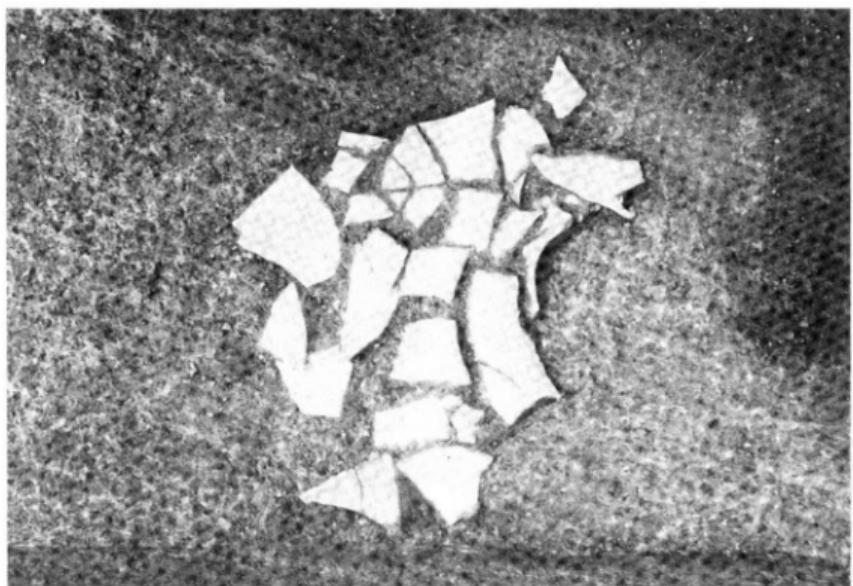




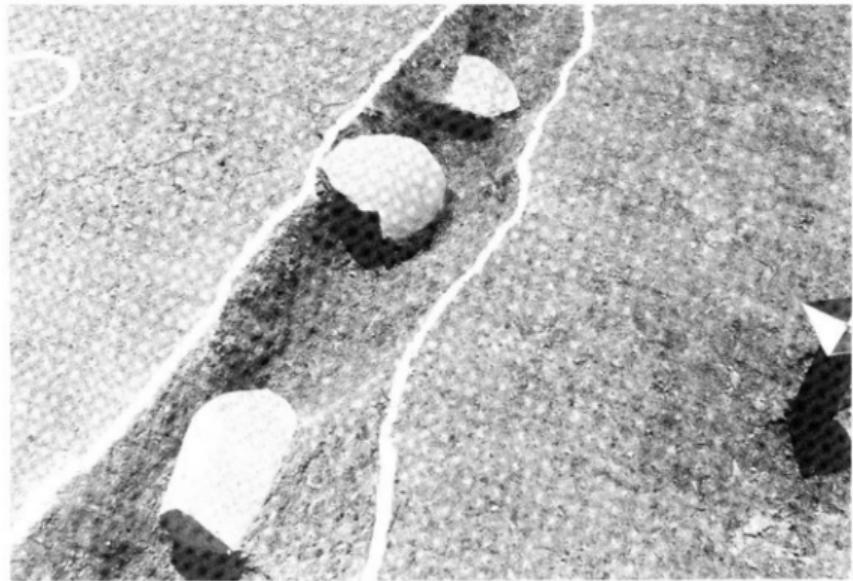
SH-1（南から）



SH-2（東から）

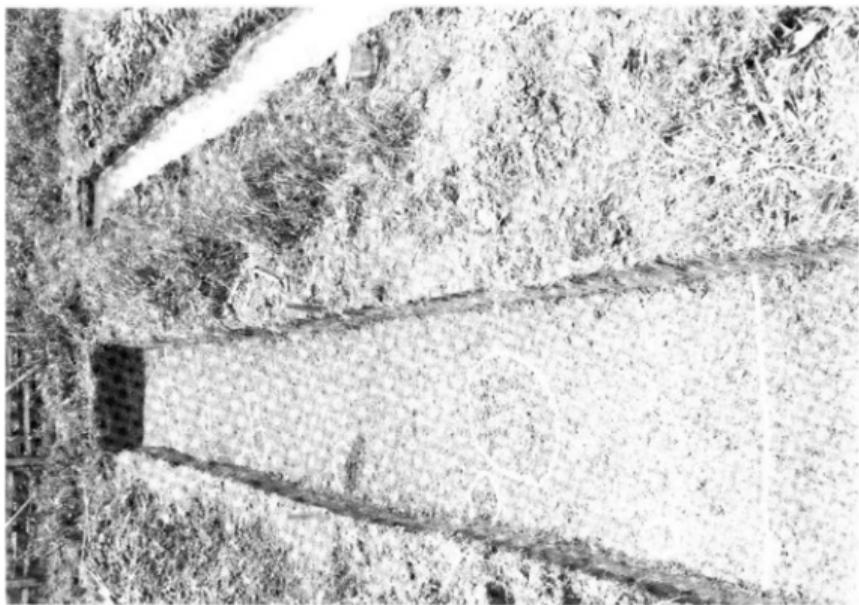


SD-1 遺物検出状態（遺物は 148 ）



SD-2 遺物検出状態（中央の遺物は 44 ）

図版第四 東円寺跡 88年-1区及び2区遺構検出状態



東円寺 88年-2区(北から)

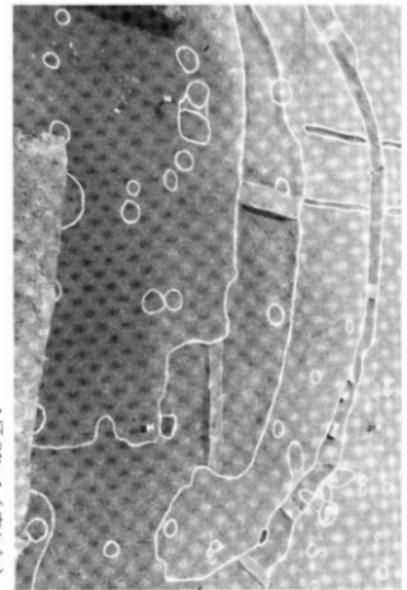


SX-1(西から)

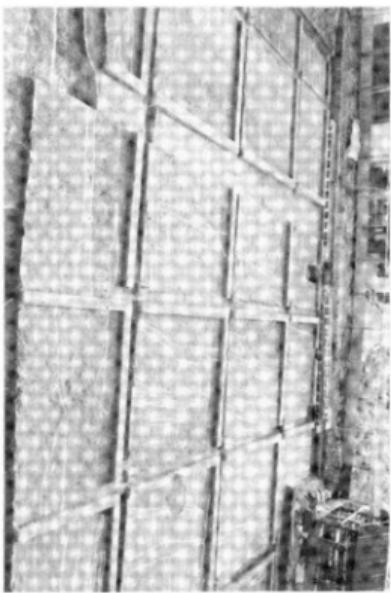


SX-1(東から)

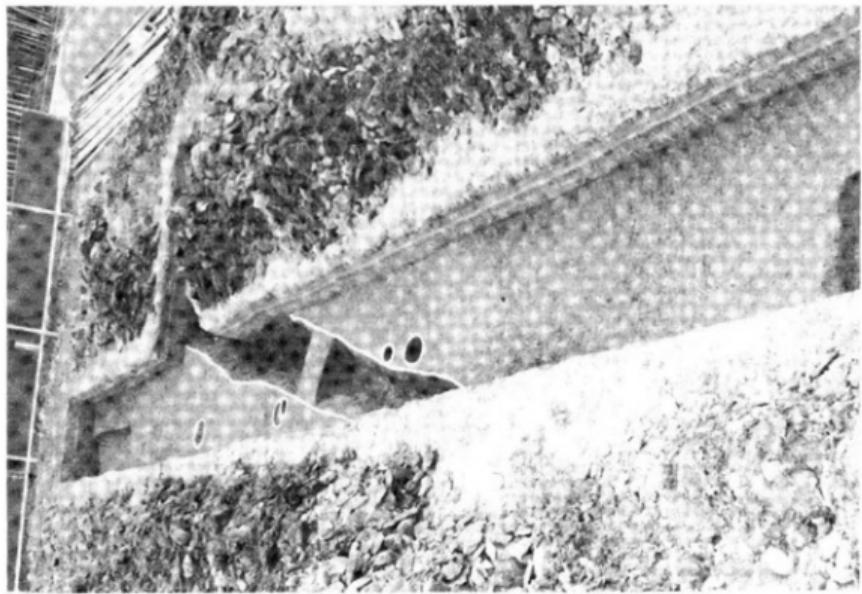
図版第五 東円寺跡 88年1区及び6区遺構検出状態



1区 SD-1 (東から)

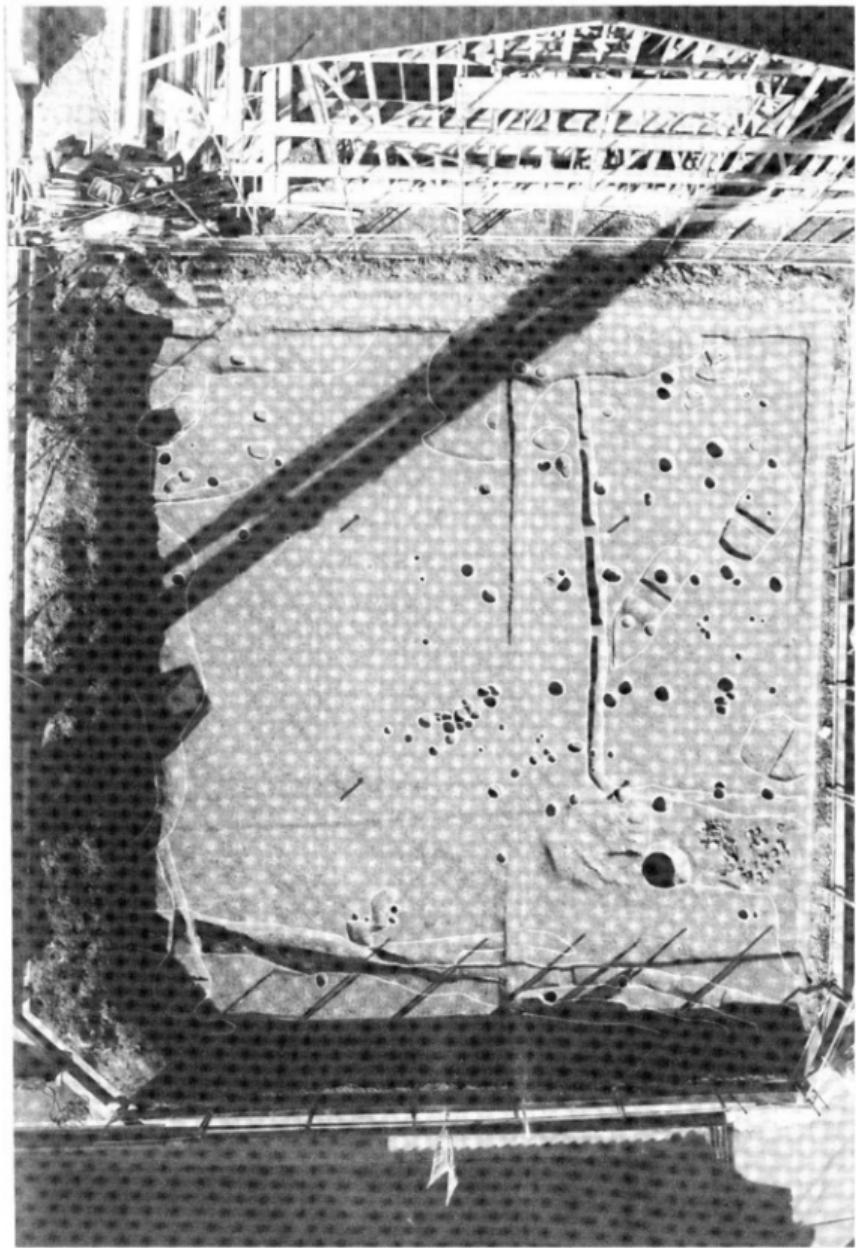


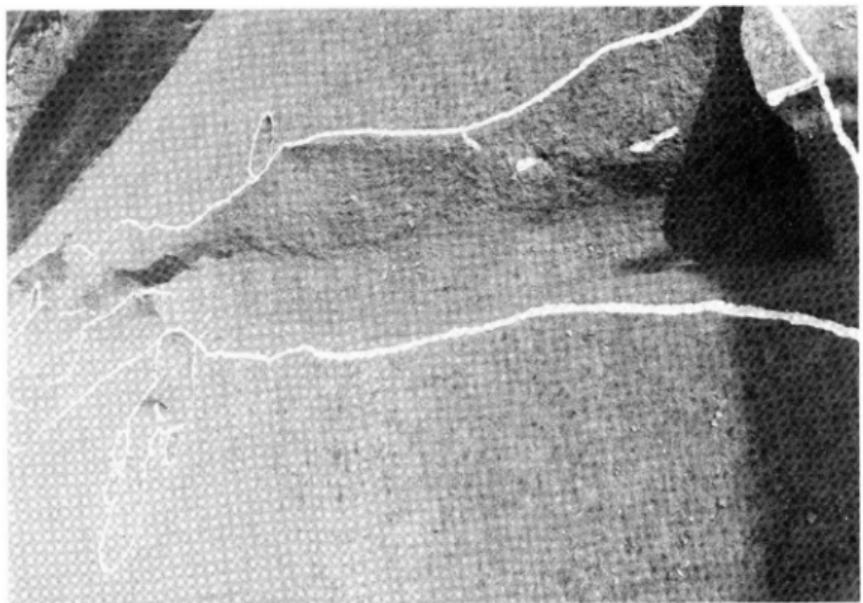
1区 路跡 (東から)



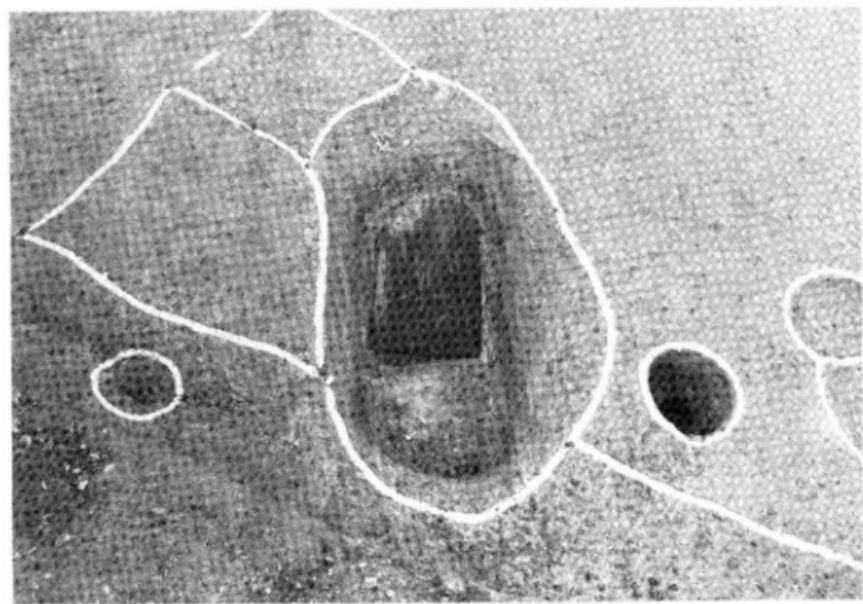
6区A トレンチ (東から)

図版第六 東円寺跡 88年1-6区全景（右上が北）





SD-05.06.07

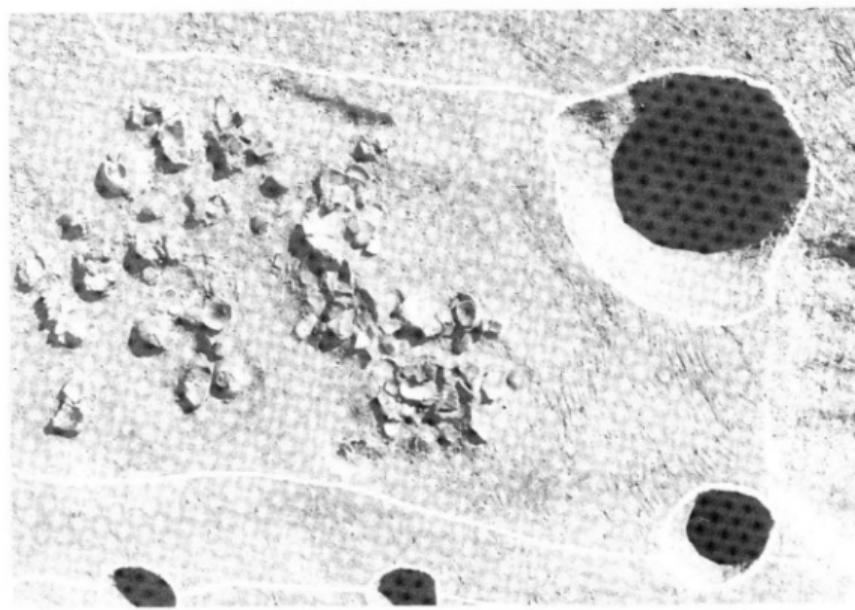


SK-02 (上が北)

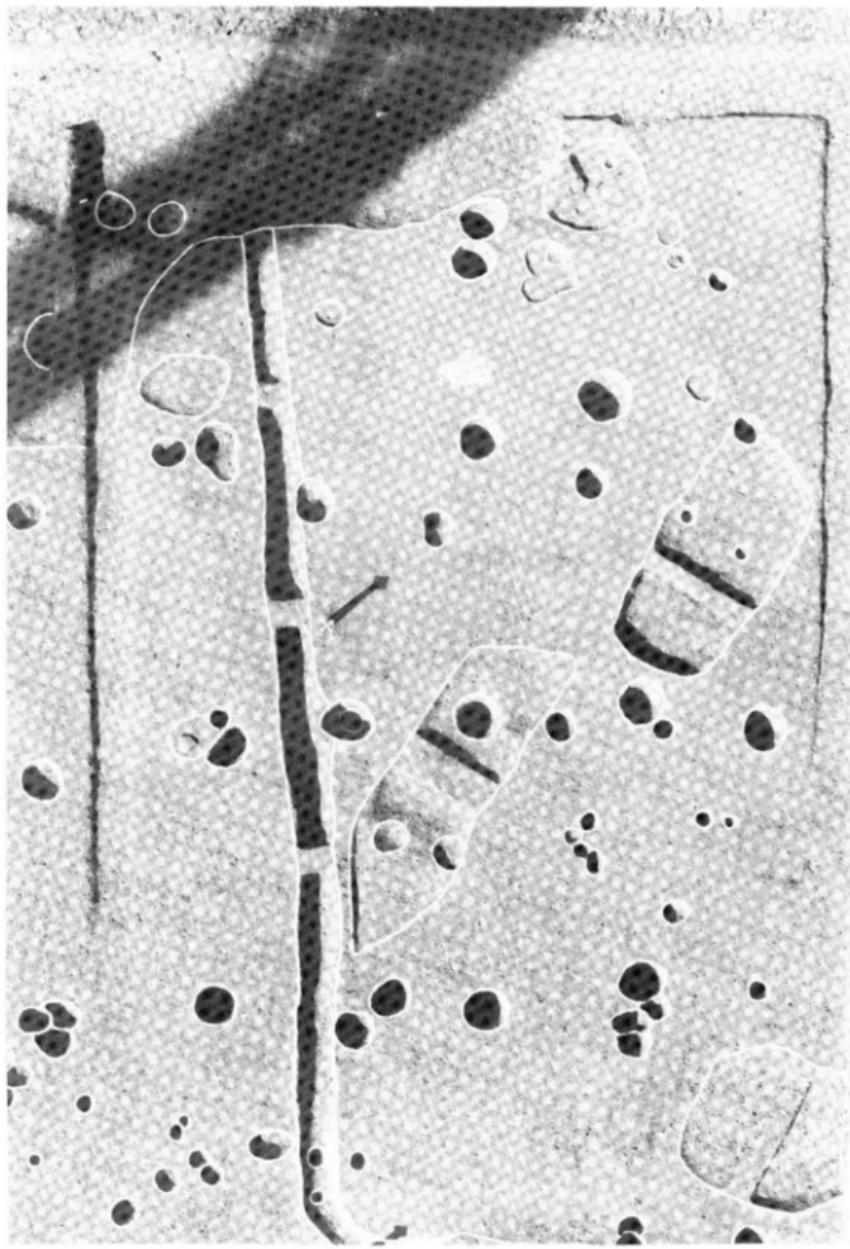
図版第八 東円寺跡 88年I-6区遺構検出状態



SD-03 検出状態（東から）

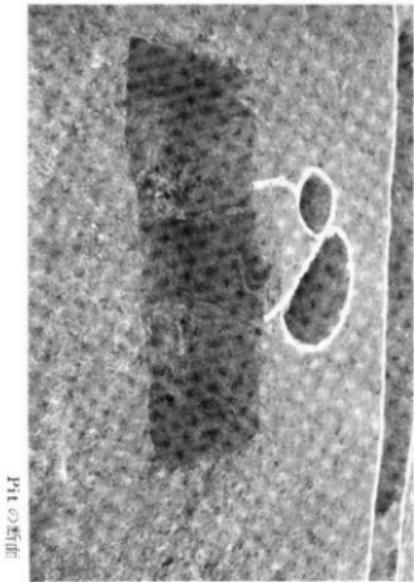
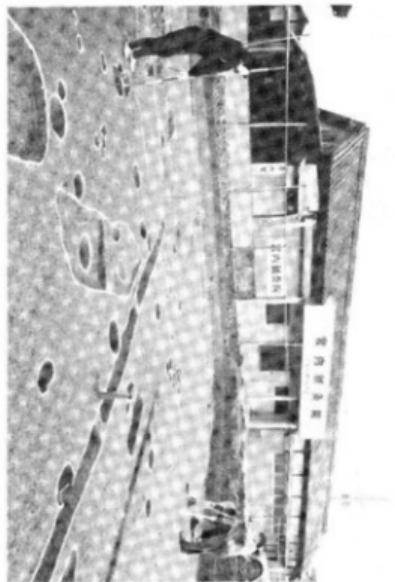
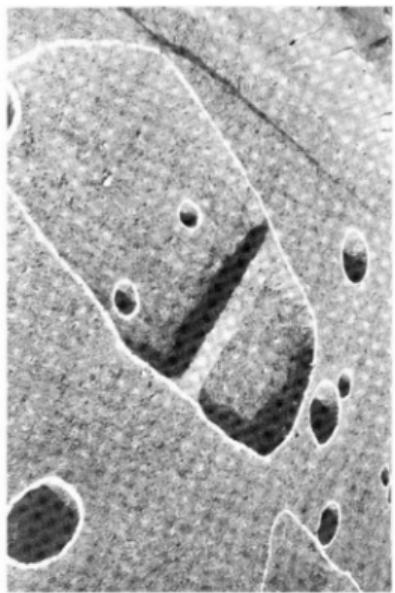


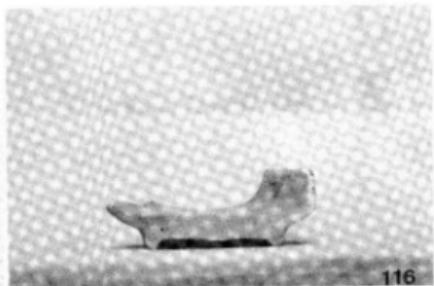
土器溝り（上が東）



(上が西)

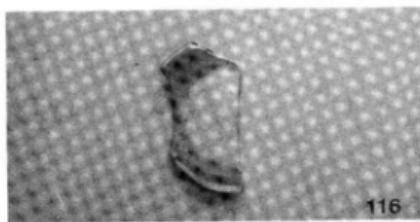
図版第十 東円寺跡 88年 - 6区 遺構検出状態





43

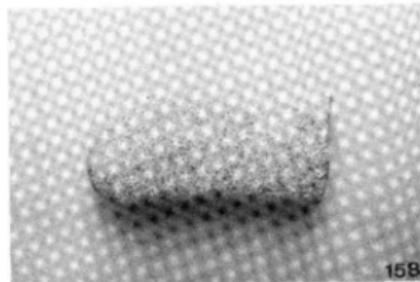
116



116



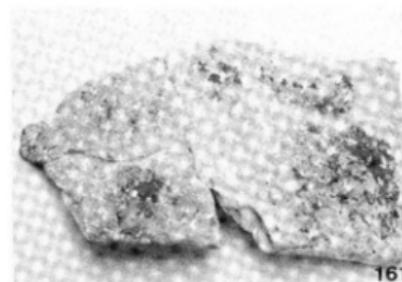
116



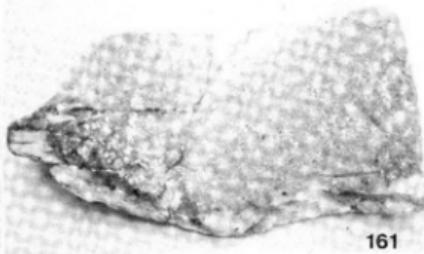
15B



159

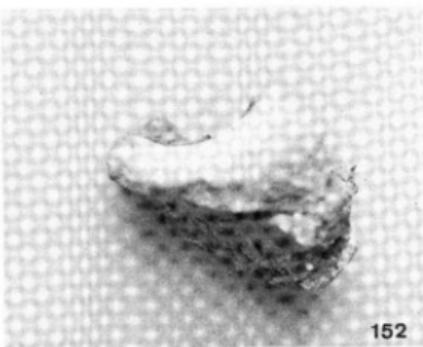
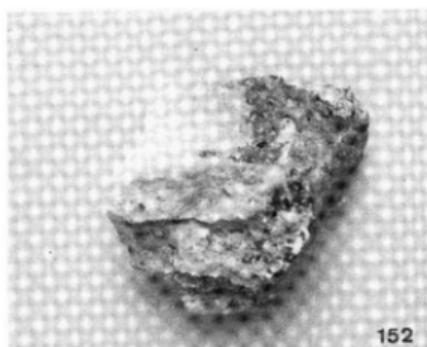
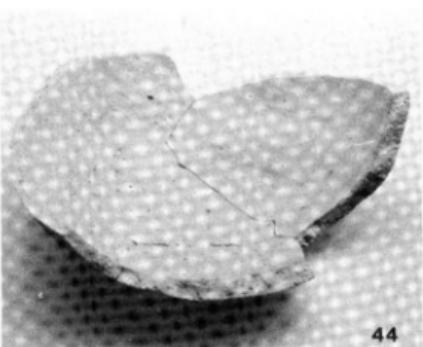
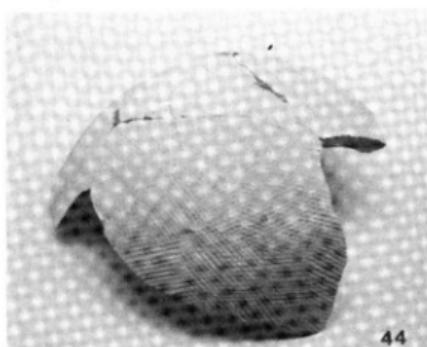


161

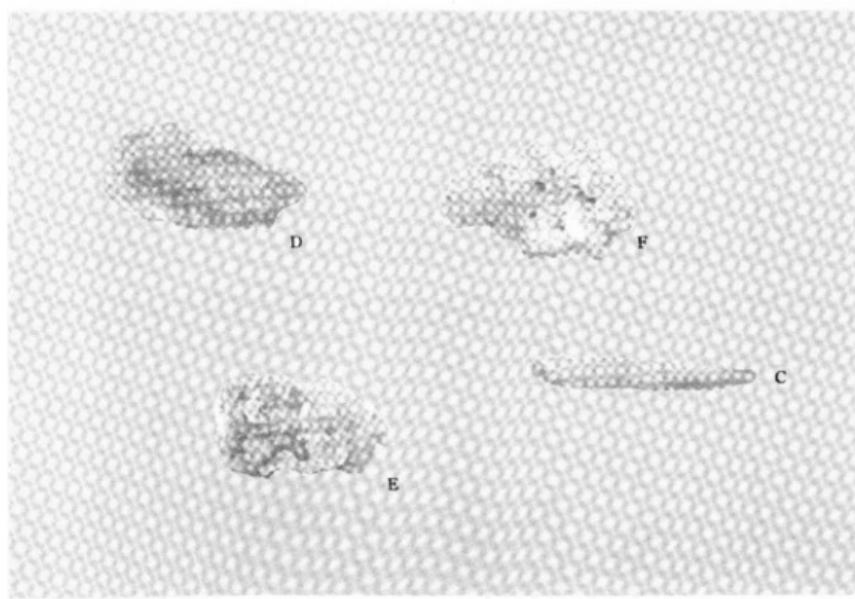
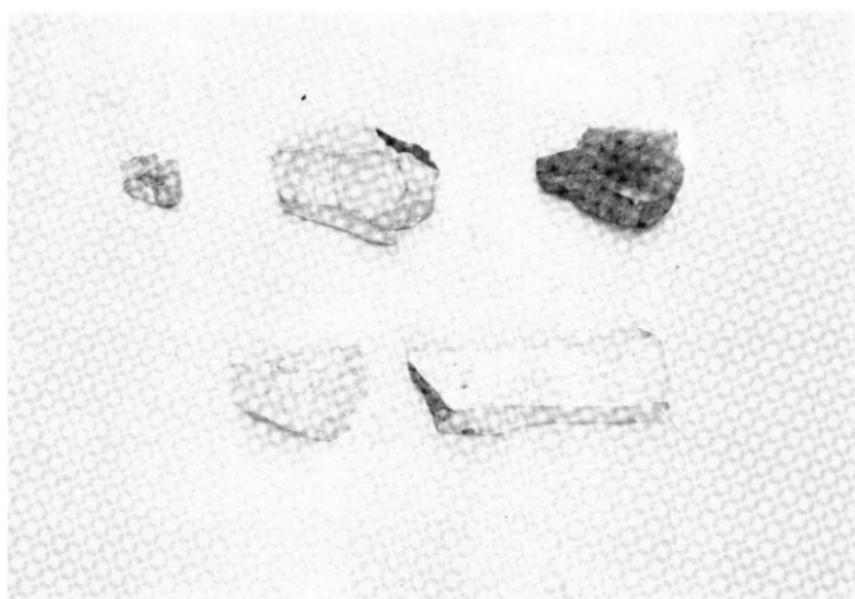


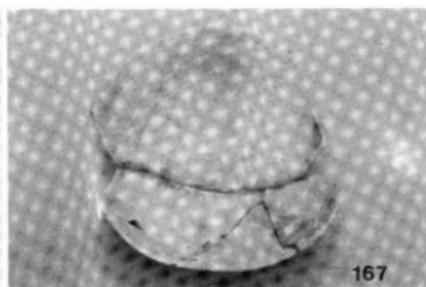
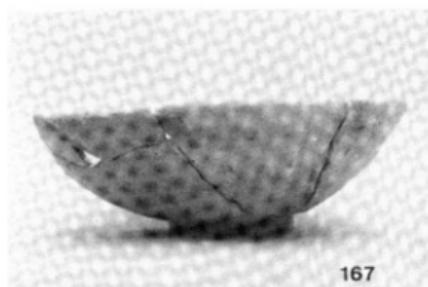
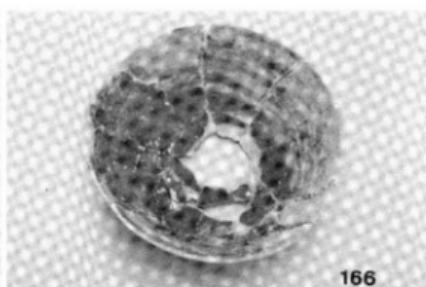
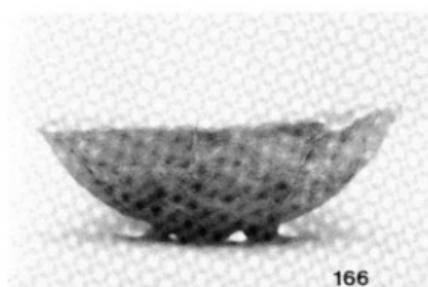
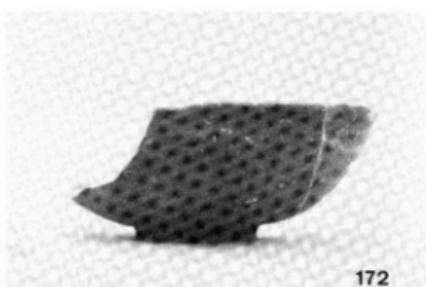
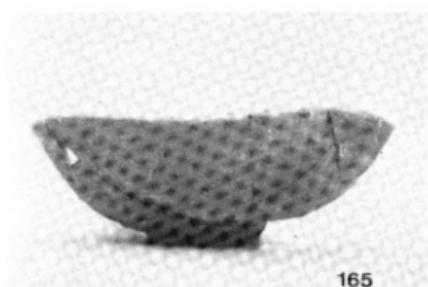
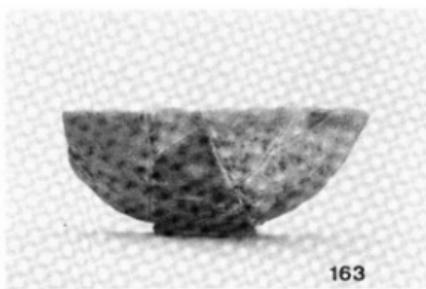
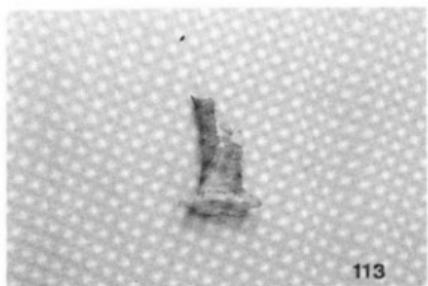
161

図版第十二 東円寺跡 88年・I区出土遺物(2)



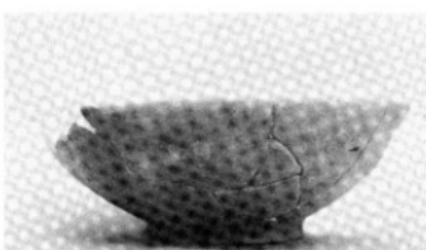
圖版第十三 東円寺跡 88年・1区出土遺物(3)



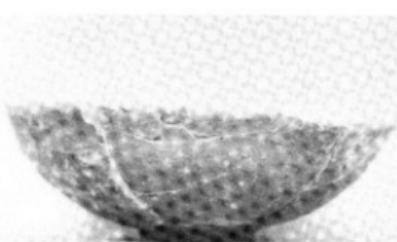




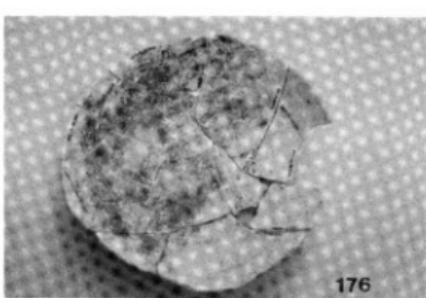
174



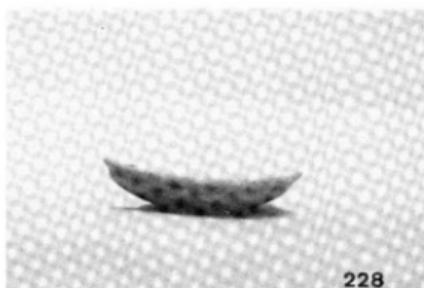
175



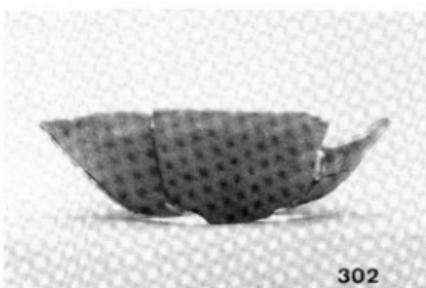
176



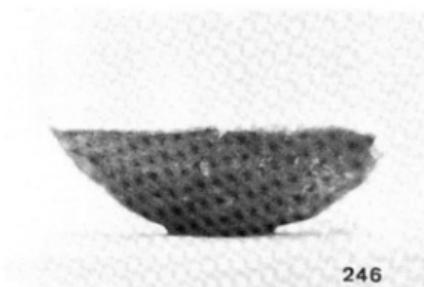
176



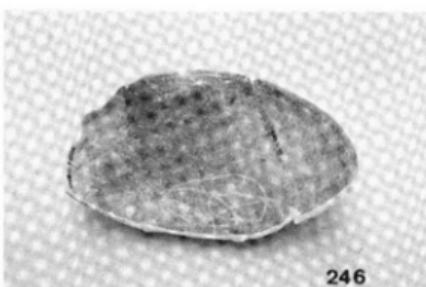
228



302



246



246